

長岡京跡

京都都市計画道路1等大路第3類第46号
外環状線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和55年度

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

例 言

- 1 本書は、京都都市計画道路1等大路第3類第46号外環状線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。
- 3 昭和55年度実施した発掘調査地は、A・B・C・D・E区の5区に分けて実施した。
- 4 昭和55年度実施した試掘調査は、試掘1・2・3・4・5・6・7・8の8個所で実施した。
- 5 本文中で用いた標高は、T P（東京湾平均海面高度）を用いている。
- 6 図中X・Yは調査基準線であり、原点X O・Y Oは第6座標系ではX = -118, 915, 523・Y = 25, 102, 925に当り、調査基準線はN0° 49' 16" E振れている。

目 次

I	調査にいたる経緯	1
II	調査経過	2
	(1) 調査計画	2
	(2) 調査経過	2
III	遺跡の調査	5
	(1) 調査概要	5
	A区	5
	B区	5
	C区	6
	D E区	6
	(2) 遺構・遺物	7
	〔平安時代の遺構・遺物〕	7
	①溝	7
	〔長岡京期の遺構・遺物〕	7
	①掘立柱建物	7
	②柵列	8
	③井戸	8
	④土壇	9
	⑤溝	9
	〔長岡京期以前の遺構・遺物〕	10
	①竪穴住居址	10
	②土壇	10
	③溝	12
IV	試掘調査	14
	試掘 1	15
	試掘 2	15
	試掘 3	16

試掘	4	17
試掘	5	18
試掘	6	19
試掘	7	20
試掘	8	21
V	まとめ	22

図 版 目 次

図版,	一	遺跡	A区 平面図 (長岡京期)
	二		B区 平面図 (長岡京期)
	三		B区 平面図 (長岡京期以前)
	四		C区 平面図 (長岡京期)
	五		C区 平面図 (長岡京期以前)
	六		D E区平面図 (長岡京期)
	七		D E区平面図 (長岡京期以前)
	八		①航空写真(西より)
			②航空写真(東より)
	九		①A区全景
			②S E-A 0 1
			③S E-A 0 1
	十		①B区全景
			②S B-B 0 1
	十一		①S K-B 0 1
			②S K-B 0 1
			③S K-B 0 1
	十二		①B区全景(長岡京以前)
			②住居址-B 0 1
	十三		①住居址-B 0 1

図版,	十三	②SK-B03
		③SK-B07
	十四	①SB-C01
		②SA-C01
		③SD-C01
	十五	①C区全景(長岡京以前)
		②C区
		③C区
	十六	①D区SB-DE01・SE-D01
		②D区全景
	十七	①E区全景
		②E区全景
	十八	①SD-DE01
		②SB-DE03
		③SB-DE03
	十九	①柱根
		②柱断面
		③SE-DE01断面
	二十	①D区西部全景(長岡京以前)
		②D区中・東部全景(長岡京以前)
	二十一	①E区全景(長岡京以前)
		②E区SD-25
		③DE区SD-26・27
	二十二	①SK-DE14
		②SK-DE15
		③SK-DE18
		④SK-DE111
	二十三	①試掘1全景
		②試掘2全景
	二十四	①試掘3全景

図版, 二十四		②試掘4全景
二十五		①試掘5全景
		②試掘6全景
二十六		①試掘7全景
		②試掘8全景
二十七	遺物	SE-A01 出土土器：①須恵器蓋 ②須恵器瓶子 ③土師器高杯 SK-B06 出土土器：④須恵器杯身 SK-B07 出土土器：⑤⑥土師器小型丸底壺 ⑦ 土師器甕 ⑧土師器高杯
二十八		墨書土器：①須恵器蓋（D区包含層） ②須恵器蓋 （「蓋」SE-A01） ③土師器杯（D区包含層） ④土師器杯（E区包含層） ⑤土師器皿（SD-E 13） ⑥須恵器杯（SD-E105） 瓦：⑦重圈文軒丸瓦（SE-D01） 木製品：⑧皿（SE-D01） 古銭：⑨和同開珎（E区包含層），万年通宝（E区 包含層），神功開宝（D区包含層） 土錘：⑩（SE-D01）
二十九		紙（SK-B01）：①紙片1表 ②紙片1裏 ③紙 片2表 ④紙片2裏
三十		SK-B06 出土土器（弥生式土器）：①鉢 ②鉢 ③甕 ④鉢 ⑤把手付鉢 ⑥甕 ⑦甕 ⑧甕
三十一		SK-B06 出土土器（弥生式土器）：①手づくね型 土器 ②高杯 ③短頸壺 ④壺 ⑤長頸壺 ⑥壺
三十二		SK-B06 出土土器（弥生式土器）：①壺 ②壺 ③壺 ④壺 ⑤手焙型土器

插图目次

图, 1	调查位置图	1
2	调查地全体图	3 - 4
3	B区北壁断面图	5
4	试掘1 平面图	1 4
5	试掘2 西壁断面图	1 5
6	试掘3 平面图	1 6
7	试掘4 平面图	1 7
8	试掘5 平面图	1 8
9	试掘6 平面图	1 9
1 0	试掘7 平面图	2 0
1 1	试掘8 平面图	2 1

I 調査にいたる経緯

当発掘調査は、京都市建設局都市建設課による外環状線街路新設工事に伴い、当一带が長岡京・羽東師遺跡の埋蔵文化財推定範囲に含まれることから実施されることとなった。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、京都市埋蔵文化財センターの指導のもとに、都市建設課と協議の結果、昭和55年度は、西羽東師川以西、京都市南農協羽東師支店の東を南北に通る道路以東の計画範囲中で発掘調査を実施する運びとなった。

計画道路は、府道水垂上桂線より国道171号線を結ぶ幅22mの東西道であった。したがって今年度は上述の区域を発掘調査し、これ以西は、買収地の中で試掘を実施し、その結果をもとに来年度以後発掘調査することとなった。

当付近の埋蔵文化財は、長岡京跡と羽東師遺跡（古墳時代）が現在までに確認されている。長岡京跡については、既往の調査から、左京四条二坊・三坊にあることがわかっており、現在建設中の日本専売公社工場用地内発掘調査・京都市羽東師小学校敷地内発掘調査では、長岡京から平安時代の建物跡・井戸跡・三条大路側溝等が発見され、当一带の長岡京に対する認識を一変させた。一方、羽東師遺跡については、上述の羽東師小学校敷地内

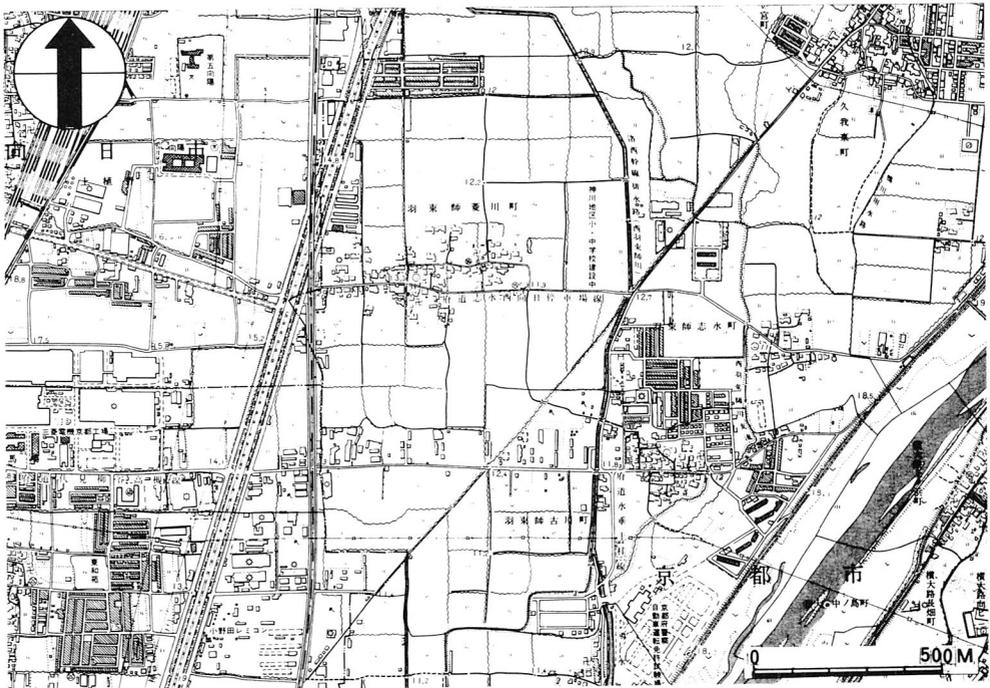


図1 調査位置図

での調査より、古墳時代の古道と土師器・須恵器を出土したことが遺跡発見の発端となった。以上のような資料から当道路建設計画は、長岡京の条坊制遺構と邸宅跡、さらには計画範囲にある川原寺推定範囲が確認可能となる重要な発掘調査と言える。

II 調査経過

(1) 調査計画

今回の調査対象地は、道路の建設予定地であり、東は西羽束師川から西は国道171号線までの東西約800m・南北約20mの極めて細長い調査地である。このために調査の都合上、調査対象地を現存の道路或いは川によって、東より約100mごとに区切り、それぞれをⅠ～Ⅷブロックとした。更にその中で、200～400㎡のトレンチを設定し、原則として東から調査に着手した順にA区・B区……とアルファベットで各トレンチ名を付け、調査に当たる事とした。今年度の調査はⅠ～Ⅲブロックまでを対象としたもので、東よりA区・B区・C区・DE区の4箇所のトレンチを設定し、調査を開始する事とした。その他のⅣ～Ⅷブロックまでについては、8箇所の試掘調査で遺構の確認を行う事とした。

(2) 調査経過

調査開始時、ⅡブロックおよびⅢブロックに下水道工事用の立坑が開口していた。したがって、調査はⅠブロックでA区、Ⅱブロック中の下水道立坑の東側でB区をまず開始した。A・B区の調査では、長岡京期・弥生時代の遺構を良好な状態で検出できた。

A・B区終了後、調査は下水道工事等の都合上、ⅢブロックD区を開始し、C区を後にまわした。D区では、長岡京の条坊に関係する東洞院大路東側溝を検出することができ、先に調査したB区の溝との関連も知ることができた。D区长岡京期の下層にも、A・B区と同様弥生時代の遺構を検出することができた。

D区終了後、遺構の展開を知るため、D区の北および西側にE区を設定し、同時にⅡブロックのC区の調査に入った。E区では、東洞院大路西側溝の検出に期待したが、平安時代の河川流路のため確認することができなかった。C区では、B区の検出した弥生時代の遺構の続きを検出でき、さらにB区で検出した長岡京期の溝と対になる南北溝が検出できこの部分が小路となることがわかってきた。

以上ⅠブロックからⅢブロックまでの発掘調査終了後、ⅣブロックからⅧブロックまでの間で8箇所を選び、試掘調査に入った。Ⅴブロックで1・2、Ⅵブロックで3、Ⅶブロックで4・5・6・7、Ⅷブロックで8を実施した。

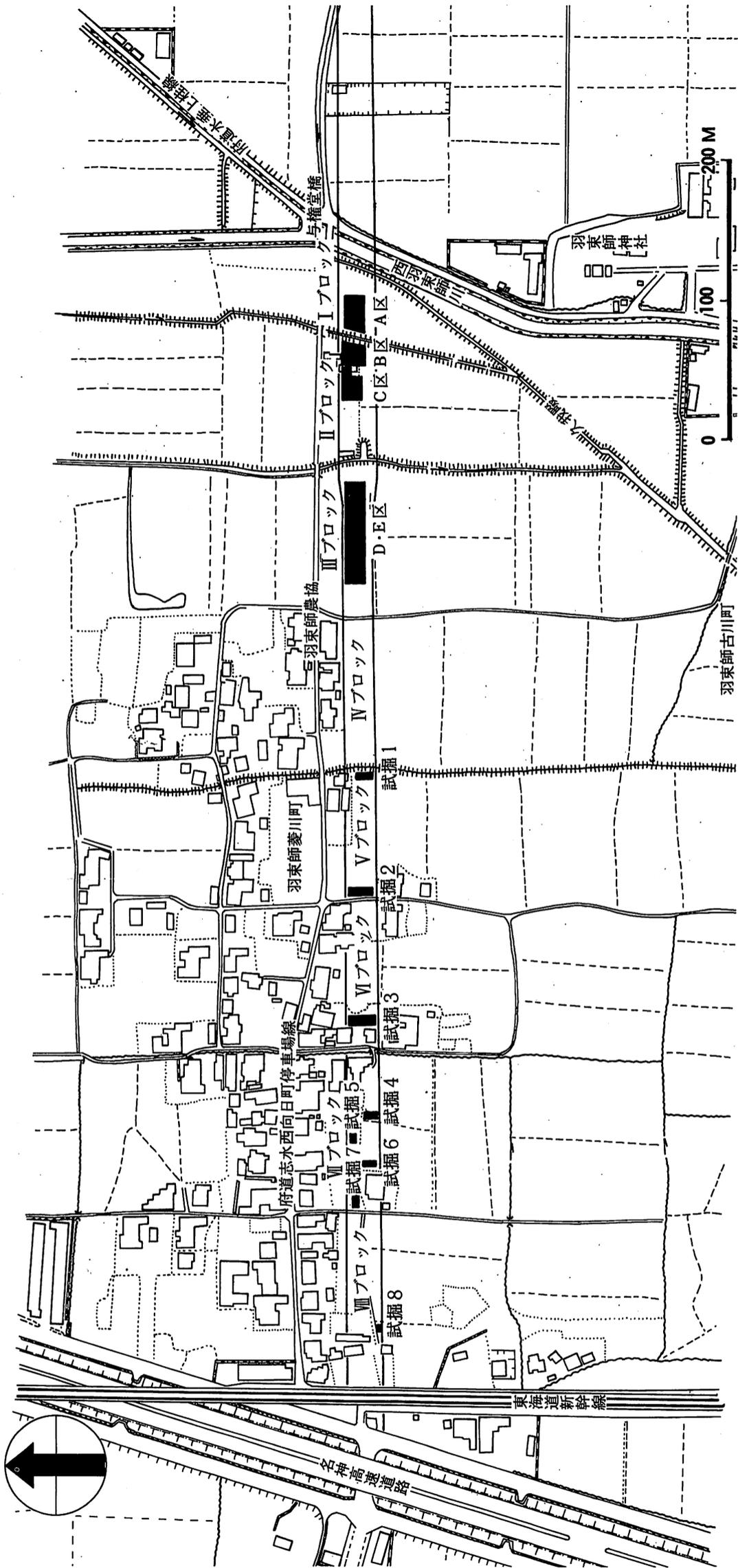


図2 調査地全体図

III 遺跡の調査

(1) 調査概要

ここでは、A区からDE区までの調査について、遺構、層序、遺物等の大まかな概要について述べることにする。試掘調査については、後の記述に譲ることとする。

A区

調査対象地は、羽東師川と農業用水路に挟まれた延長約50mの区間である。トレンチは排土場所の確保と重機導入路などを考慮して、西方の用水路寄りに東西22m、南北10mを設定した。

トレンチの基本層序は、耕土・床土が40cmで、以下灰褐色泥砂・灰褐色泥土・暗灰色泥土・青灰色泥土の順に堆積する。上層遺構には、近世の溝SD-A01・中世の土壇SK-A01がある。長岡京時代の遺構には、地表下1.2mの青灰色泥土上面から検出された柵SA-A01・02、井戸SE-A01がある。さらに下層の古墳時代の遺物包含層を50cm剥ぐと、弥生時代の溝が検出された。溝の大きさは幅7m、深さ1.2mで、南北方向に流れる。

B区

X8からX20まで、Y4からY16に区画されたIIブロックに位置する調査区である。西側は、公共下水道工事に伴い、北側は宅地のため積土が施されているが、大半は、水田のままである。

基本層序は、約20cmの耕土下に淡黄褐色泥土・明灰色泥土・黄褐色泥土・黄灰色泥土・淡黄褐色泥土層が堆積している。SD-01は中・近世の溝であるが、黄褐色泥土層を切って成立しており、長岡京

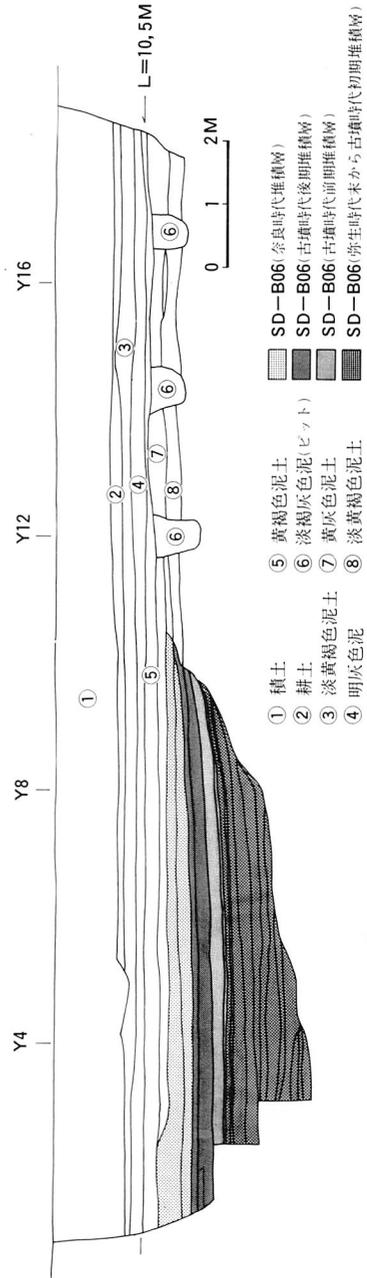


図3 B区 北壁断面図

期の遺構は黄褐色泥土層を除去した黄灰色泥土層上面で成立している。また、古墳時代中頃の遺構は淡黄褐色泥土層を切り、弥生時代後期の遺構は茶褐色泥砂層を切り込んで成立している。

検出された主な遺構は、長岡京期の溝・柵列・掘立柱建物・土壇などで、また、長岡京期以前の遺構としては、古墳時代中頃の土壇・同前半の土壇があり、弥生時代後期の竪穴住居・土壇などが検出されている。

出土遺物には、長岡京期から弥生時代後期にわたる土器・木製品・瓦などが遺物整理箱(34×54×15cm)に約25箱分出土しており、各遺構から検出している。

C区

IIブロックに位置し、B区の西側に接する。X15からX19、Y-4からY-24の地区である。当地区は公共下水道工事の関連上、既に盛土が施されており、また、調査区も若干狭くなった。

堆積層は、基本的にB区と同様である。しかし、C区の大半は、弥生時代後期から長岡京期にいたる落ち込み(SK-C06)である。この遺構からは、多量の弥生後期土器が出土しており、完形品約50点の他、遺物整理箱約30箱出土している。

D E区

D E区は、第IIIブロックのほぼ全域にわたり、X10～X26、Y83～Y155の部分にあたる。この中において、まず始めにY84～Y135、X10～X20までの部分を調査し、D区とし、更に残りの部分を拡張し、これをE区とした。しかしながら、両区に重複する遺構が少ない為に、ここではD E区という一地区として取り扱うこととした。

検出した遺構は、平安時代・長岡京期・長岡京期以前の3時期に大きく分けることが出来る。平安時代の遺構としては溝(河川)があり、これは褐色の泥砂層を切り込んで形成されている。長岡京期の遺構としては、掘立柱建物2棟・柵1列・井戸1基・溝40本・土壇5箇所、等がある。これらは淡灰色泥土層を切り込んで形成されており、標高は約10.5mである。長岡京期以前の遺構としては、溝10本・土壇2箇所がある。これらは淡灰色泥土(微砂混り)層を切り込んで形成される古墳時代後期のものと、淡緑灰色泥土(地山)を切り込んで形成される弥生時代末から古墳時代初期のものに細分される。前者は標高10.3mでSD-DE26、後者は標高約10.0mでSD-DE25、SD-DE26、SD-DE15等がある。

出土遺物は、総量で、遺物整理箱に25箱分が出土している。

(2) 遺構・遺物

ここでは、A区からDE区までの主な遺構を取り上げ、その遺構に関連した遺物について述べる事とした。その他の遺構・遺物については、まだ未整理の段階なので、後の機会に譲る事とした。

〔平安時代の遺構・遺物〕

① 溝

—SD—DE01—

DE区の西端において検出された溝(河川)で、幅20m以上、深さは1.5mである。溝の形状は極めて凹凸が激しく、複雑な形である。この区では、東岸と溝のほぼ中央付近までが検出されたもので、西岸は調査区より更に西側にあると考えられる。この河川に伴うものとしては、多数の杭、建築材を転用して作られたしからみ状のものがある。この溝の埋土は、ほとんど全てが砂礫層であり、その中から平安時代中期の緑釉皿、灰釉椀、須恵器杯、土師器杯等が出土している。

〔長岡京期の遺構・遺物〕

① 掘立柱建物

—SB—B01—

梁行2間、桁行2間以上の北廂付東西建物である。梁・桁ともに心々間240cmを計り、廂の梁120cm、同じく桁行心々間は240cmを計る。柱穴掘方は、平均70cmの方形で、深さは80cmある。柱痕の確認された柱穴は2例あり、25~30cmの太さのものである。根固めの為、河原石を入れた柱穴が2例、凝灰岩の破片、平瓦の破片を入れた柱穴が各1例ある。

—SB—C01—

梁行3間、桁行1間以上の南北建物か。梁行心々間240cm、桁行280cmを計る。柱穴掘方は、平均80cmの方形プランを呈する。柱痕の確認されたのは1例あり、25cmの太さの柱である。

建物東側5mに、条坊に伴うと考えられる溝(SD—C01)があり、東側2.4からは柵列(SA—C01)が検出されている。

—SB—DE01.02—

SD—DE01の東側で建物跡を2棟検出した。両建物は、同一の軸線で計画されており、あるいは特殊な構造をした一棟の建物の可能性があるが、当調査では明確にできなかった。両建物とも東西棟で、総柱であり、桁行寸法も同一で、西より2.8m・2.5m・2.5

m・2.5 mを測る。梁行寸法は、DE01が2間で、北より2.8 m・2.6 mを測り、DE02が1間で、2.8 mを測る。ただし、両建物とも同一規模を有するものとすれば、DE02は北半分を検出したものと判断できる。

柱穴の状況は、各々柱当り痕跡から、柱は径0.3 m位のもので、掘方は一辺約0.7 mの方形のプランを有し、深さは0.6 m程度を確認した。

DE区の調査で確認した建物跡のうち、当建物が最も大きい規模を有し、しかも上述したように、一町分の最も西端に位置し、特殊な構造を有しており今後の類列を待ちたい。

—SB—DE03—

DE区の東において検出された掘立柱建物で、東西2間、南北2間である。柱穴の間隔は約3 mで、西側の1間が2.7 mとやや狭い。柱穴の掘方は一辺30cmの方形で、深さも約30cmである。この建物は、方向がやや東に振れており、更に、長岡京期と考えられる溝を切って作られており、やや時期がくだるものと考えられる。

② 柵列

—SA—B01—

南北に並ぶ柱穴列で、3間分確認された。南側は、中世の溝により破壊されていると考えられる。北柱穴からの柱穴間距離は、280 cm・240 cm・240 cmである。掘立柱建物SB—B01とは、柱穴心々間で240 cm西に並び、北から2番目からの柱穴は、SB—1柱穴と並ぶ。また、西側1.5 mには溝(SD—B15)が南北に検出されている。

—SA—C01—

東西に並ぶ柱穴例であり、4間分検出された。柱穴間の心々間距離は、西側から330 cm・340 cm・340 cm・270 cmである。北側に掘立柱建物SB—B01があり、その間は、柱穴心々間で240 cmある。

③ 井戸

—SE—A01—

X10、Y39の地点で検出された。井戸の掘方は円形で、上部の径1.5 m、底部で径0.9 m、深さ1.7 mである。井戸枠は四本の隅柱に胴縁を渡し、その外側に側板を当てたもので、枠の内法は0.8 mである。隅柱は、径13cmの原木の円柱を使い胴縁を固定する枘穴を上下3段にあける。胴縁は断面が7×4 cmの長方形である。側板は四方にそれぞれ5枚の縦板を当て、その裏に目板を2～3重に当てる。側板は幅20cm、厚さ2.5 cmで転用材を用いる。埋土は青灰色粘土である。出土遺物には、長岡京時代の土師器、須恵器がある。

—SE—DE01—

SB—DE01の東南に検出された遺構で、深さ1.2m、一辺3.2mの隅丸方形の素掘りの井戸である。検出面から約30cmは、ほぼ垂直に掘り込まれ、そこで幅30cmの段を作り、更に地山と考えられる緑灰色泥土層まで掘り込まれている。しかしながら、底は湧水層ではなく、井戸とするにはやや疑問が残る。埋土は、大きく7層に分かれる。遺物は、土師器杯、須恵器杯の他に、軒丸瓦、木製の皿、櫛、土師質土錘、多量の木屑等が出土している。

④ 土壇

—SK—B01—

上部は、現代攪乱により掘り込まれており、弥生時代の遺構面と同一レベルで検出されている。東西85cm、南北80cmの隅丸方形を呈す土壇で、深さは50cmを計る。埋土は4層に分層され、この遺構からの全ての遺物は第II層下部から出土している。第III層は椀と思われる腐蝕土層であり、この層の上面に付着する状態で遺物は検出された。遺物には、土師器杯・甕・ミニチュアのカマドと甕、須恵器杯・甕、瓦、砥石、木製曲物などが出土している。また、これらの遺物これらの遺物に混在して漆紙文書、「戸籍」断簡が出土している。この紙片は、反古を再利用した際に漆を塗ったために、今日に致るまで地中の中で保存されていたものと思われる。戸籍断簡は、2片出土している。

⑤ 溝

—SD—B15—

Y8ライン上を南北に検出された溝である。検出面での上幅50cm、深さ25cmで、埋土は暗灰色泥土層である。出土遺物は殆ど無く、下層検出の竪穴住居址に伴う弥生式土器が少量出土しただけである。溝の東側1.5mに柵列SA—B01、その東側2.4mでは掘立柱建物SB—B01が検出されている。この溝は、長岡京の条坊に伴うものと考えられ、南北方向の小路東側溝と推定される。

—SD—C01—

調査区東端で検出。調査範囲が狭い為、溝であるか否かは不明であるが、堆積状況から溝とした。B区検出の溝SD—B15とは、溝心々間で10mを測り、南北方向の小路西側溝と推定される。

—SD—DE02—

DE区の中央やや西寄りに検出された溝である。この溝は、ほぼ真北から真南へ向って流れる幅1.5m、深さ60cmのU字形の溝で、形状から見て、明らかに人工的に掘られたもの

であると考えられる。この溝の岸には部分的に杭の跡と考えられるピット状のものが見られ、或いは素掘りのまま使用されたのではなく護岸がなされていた可能性が考えられる。埋土は、大きく分けて2層あり、この2層は明確に区別される為、溝の改修も考えられる。上層は暗灰色泥土で、遺物は殆ど見られない。下層はやや砂質を帯びた暗灰色泥土で、この層からは長岡京期の土師器杯、木の削り屑などが出土している。この溝は、位置・方向から見て長岡京の三坊大路の東の側溝ではないかと考えられている。

〔長岡京期以前の遺構・遺物〕

① 竪穴住居址

一住居址-B01-

第VI層上面で検出された隅丸方形を呈する竪穴住居址である。北西側は、土壇SK-6によって破壊されている。南東側の一辺は4.3mである。柱穴は4本確認され、柱間は東西2m、南北2.1mである。壁溝は全周するようである。幅20cm深さ約5cmであった。南東壁中央からは土壇が検出されており、床面中央部にも円形の土壇が認められた。床面は、所謂「貼床」は認められず、地山面を床としている。検出面から床面までは約15cmあり、埋土は2層に分層される。上層からは長頸壺が、下層床面直上からは甕・壺などが出土している。このうち、床面に貼りついた状態で出土した壺の破片は、北西側の土壇SK-6第X層出土の壺破片と同一個体であった。時期は、弥生時代後期後半のものである。

② 土壇

一SK-B02-

北側が調査区外となるため、南半部のみ調査。検出面では、一辺4.5mの隅丸方形を呈する竪穴住居址と考えられたが、調査の結果、竪穴住居址と断定する根拠が無く、一応土壇とした。底部まで約15cmあり、埋土は赤褐色泥砂層一層である。焼土・炭をブロック的に含み、「ふいご」も出土している事から、工房址とも考えられる。他に、須恵器杯身・杯蓋・高杯などが出土している。時期は、古墳時代中頃と思われる。

一SK-B03-

上幅短径1.2m、長径2m以上の楕円形を呈すと思われる土壇である。西南部は、近世の溝SD-01によって破壊されている。底部は1m×1.6mの長方形を呈しており、土壇墓であることも推定される。埋土は6層に分層されるが、上層の濁黄青灰色泥砂層から多量の弥生式土器が出土している。土器は小型壺・甕、鉢、高杯などであり、一括資料として、土器編年上重要な資料である。

—SK—BC06—

B区西北部、C区で検出された自然流路である。当初B区の調査段階に於ては、遺構の性格が不明であった為、土壇として遺構登録をおこなったが、C区の調査の結果、自然流路である可能性が強くなった。

堆積土は、I層からIV層までに分層できる。第I層は長岡京期の遺構面を形成し、この第I層中からは、奈良時代と思われる須恵器瓶子が出土しているが、出土遺物の量は第II層ともに極めて少ない。第III層からは、古墳時代中頃の須恵器が出土しているが、第I・II層と同様に量は少ない。第IV・V層からは、須恵器を含まない時期の古墳時代の遺物が出土している。第V層の腐植土を除去した段階で、SK-6肩部より土壇SK-07が検出されている。第V層および土壇SK-07の出土遺物は、古墳時代前期布留式のものである。第VI層以下IV層までは、堆積土の分層は行えたが、出土遺物の時期差は少ない。第X層および第XII層から多量の遺物を出土している。これらの遺物は、弥生時代後期後半のものである。出土した土器には、長頸壺・短頸壺などの壺類、甕、鉢、高杯、器台、蓋、手焙形土器など、遺物整理コンテナ約40箱分が出土している。

—SK—B07—

径約2.5mの円形を呈す土壇である。SK-6第V層を除去した段階で検出された。SK-6の肩部に位置するため、深さは南側で180cm北側で80cmある。埋土は、SK-6第V層が落ち込んでおり、下層から遺物が検出された。堆積状況、遺物の出土状況から井戸址とも推定される。出土遺物には、高杯、甕、小型丸底の壺などがあり、古墳時代前期布留式の時期に比定される。

—SK—DE14—

DE区の中央西寄りに検出された遺構で、長径2.4m、短径0.8m、深さ20cmの楕円形を呈する。遺物は、弥生時代末から古墳時代初期の甕、壺、高杯等が出土している。

—SK—DE15—

DE区の中央西寄りに検出された遺構で、長さ3.3m、幅0.4m、深さ15cmの長細い土壇である。この土壇は、遺物の残り状態が比較的良好で、弥生時代後期の壺、甕等に混じって多量の炭化物が出土している。

—SK—DE18—

DE区のほぼ中央に検出された遺構で、一部をSB-DE01のピットによって破壊されているが、長径2m、短径1.1m、深さ35cmの楕円形を呈する遺構であると考えられる。

遺物は、弥生時代末から古墳時代初期の甕等の破片が出土している。

—SK—DE107・108—

何れもDE区の西端に検出された遺構で、SK—DE107は長径1.5m、短径1m、深さ15cmの楕円形を呈し、SK—DE109は直径0.7m、深さ10cmの円形を呈する。これらの遺構は、上方をSD—DE01によってかなり削られており、本来は一つの土壇であったと考えられる。現在の形状と位置から推測すれば、長さ3m、幅1mの大型の土壇であったと考えられる。埋土は暗灰色泥土の単一層で、この中から弥生時代末から古墳時代初期の壺、甕等の破片が出土している。

—SK—DE109—

DE区の西部南寄りに検出された遺構で、長径1.6m、短径0.7m、深さ10cmの楕円形を呈する。埋土は暗緑色泥土の単一層で、この中から弥生時代末から古墳時代初期の壺、甕等が出土している。

—SK—DE111—

DE区の西部中央に検出された遺構で、長径2.3m、短径1.6m、深さ20cmの楕円形を呈するこの土壇からは、土器は全く出土してはいないが、全体にわたり焼土塊及び炭化物が多量に見られ、又、土壇の底の部分の土も焼けて赤く発色している。

③ 溝

—SD—DE25—

DE区の西寄りに検出された遺構で、北西から南東へ向って流れる溝である。この溝は上方をSD—DE01にかなり削られているが、幅4m、深さ80cmで、東岸に約20cm下った所で幅70cmの段を有する。埋土は、ほぼ7層から成っており、第3層目の黒色粘土層からは、弥生時代後期から古墳時代初期までの壺、甕、高杯、器台、蓋、手づくね、等が多量に出土しており、その総量はコンテナ約3箱分に当たる。この溝から出土した遺物の殆ど全ては、この層から出土したものである。その他の遺物として、サヌカイト製の石器、木器等も出土している。

—SD—DE26・27—

この遺構は、DE区のほぼ中央を北東から南西へ向って流れる溝である。検出された当初は1本の溝であると考えられたが、調査の進展に伴い、2本の溝が切り合っていることが確認された。そして、切り合いの関係から新しいものをSD—DE26、古いものをSD—DE27とした。更に、SD—DE26については、古と新に分かれる。

最も新しいSD-DE26新は、幅1m、深さ30cmのU字形を呈する溝で、埋土が3層から成り、何れも暗灰色の砂質層である。これに伴う遺物は、古墳時代後期と考えられる須恵器の杯蓋・甕、土師器の壺・甕等が出土している。

SD-DE26の古は、幅3m、深さ45cmの比較的なだらかな形状の溝で、埋土は上層から暗灰色粘土・暗灰色粘土より成っている。これに伴う遺物は、古墳時代前期の土師器の甕などの破片が出土している。又、この溝に伴うものとして、DE区のやや北寄りと南寄りの部分で、杭が2列検出されている。それは、何れも似た規模のもので、杭は溝に対してほぼ直交する方向に並べて打ち込まれており、その先は、溝の底から更に60cmから70cmまでに達する。杭は、直径5cmから10cmの自然の木材の先端部分を鋭く尖らせただけで使用されているものが殆どであるが、中には、全体が多角形に面取りされているものも存在する。

SD-DE27は、SD-DE26によって破壊されている部分を復原して考えると、幅1.7m、深さ50cmの規模になると考えられる。その形状は、幅1.7m、深さ40cmのU字形の溝の底のほぼ中央に、幅0.4m、深さ10cmの溝を掘り込んだような形をしている。埋土は、ほぼ4層から成り、この中から、弥生時代末から古墳時代初めの甕、壺等の破片が少量ではあるが出土している。

IV 試掘調査

試掘 1

試掘1トレンチは、羽束師菱川町小字勘上の街路建設予定地東端に設定した。

耕土、床上、濁茶灰色泥土と続き、表土下約0.6 mにて淡褐色砂泥ないし茶褐色砂層が見られ、この上面にて柱穴・井戸跡等を検出した。

トレンチ南部と中央東端に検出した井戸跡は、出土遺物から近世のものであることがわかった。

柱穴は、トレンチ中央より北半で6個確認した。各々柱穴は、深さ約30cmで、径は20～50cmのものであった。このうち、柱穴5には柱根が残存しており、径10cmの丸材であることが確認できた。更に柱穴1には、平安時代初頭頃と思われる杯部が欠損した高杯が、脚部を上にして直立した状態で出土した。

当トレンチの調査は、近辺の調査から出土する遺構が灰色粘土層を切り込んで検出されるのに反し、この粘土層より1層上の褐色砂層を切って検出されている。従って、これらの遺構が他の調査区のものより新しい時期のものであるのか、本来は、この層に遺構が成立していたのかは、今後の調査に待ちたい。

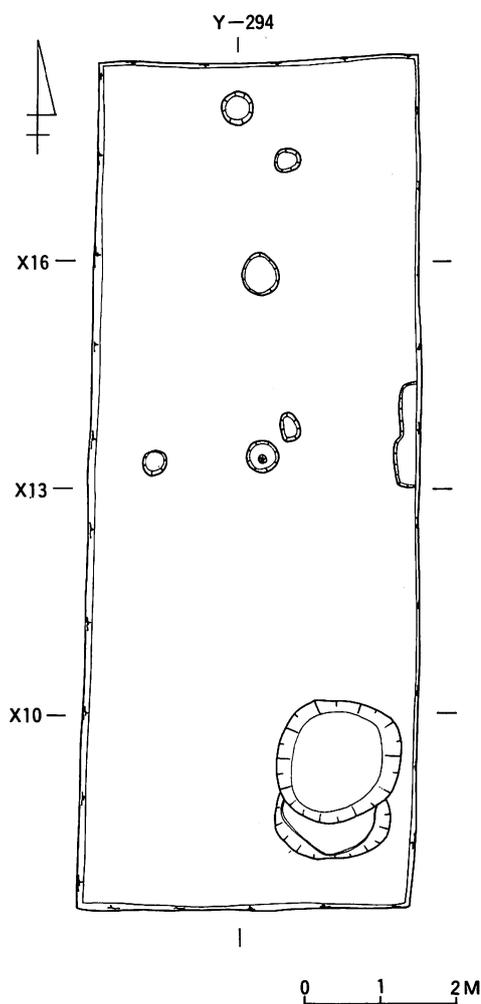


図4 試掘1 平面図

試掘 2

試掘 1 に続いて、小字勘上の西端部に試掘 2 を設定した。

耕土・床土を除去すると、直ぐ褐色砂礫層が全面に現われ、湧水が激しく見られた。トレンチ南端部で東西に杭列が隙間なく打ち込まれた状況を検出したが、これは近代の池の護岸と判った。従って、全面に見られる砂礫層の厚さと下部の遺構の状況を見る為に、中央南北に立割を実施した。

この結果、砂礫層は約 1 m の厚さで認められ、この下に淡灰色粘土が見られた。砂礫層の状況は、全体的に北から南へ下がる層変化が見られた。

淡灰色粘土の標高は 10.8 m で、これまでの検出された長岡京期の検出面と大差はなく、遺構の残存は十分に考えられる。

砂礫層は、街路調査 E 区で、平安時代の河川を検出したが、この河川が砂礫層によって埋っている事、更に、近辺の立合調査でも、砂礫層が或る幅をもって広範囲に分布していることが確認されている。堆積の厚さは、地表下 3 m にいたる個所もあり、10cm 内外という個所もある事から、現在の資料からは、小畑川の広範囲の氾濫によるもので、その時期は平安時代をそう下らない時期と考えている。

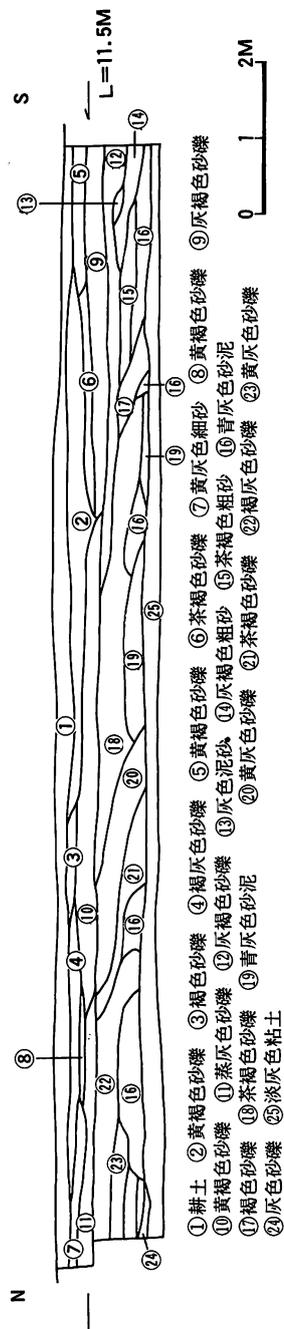


図 5 試掘 2 西壁断面図

試掘 3

試掘1・2は、調査区のうちVブロックで実施した。試掘3は、Vブロック西VIブロックの、羽束師菱川町小字東川原寺で実施した。位置は、西向寺の南側水田中である。

調査開始時、付近の水田と異なり、湿田となっていた。付近の住民に聞くと、池が極く最近まで残っていたそうである。

調査の結果、トレンチの南半で近世の遺物を含む粘土層・腐蝕土層の堆積を確認し、これが池に当ることが解った。この近世の池によって掘り込まれた以外の部分は、耕土・床土下に褐色砂礫層ないしは灰色細砂層が見られ、これにピット4個、土壇1個、および幅2mで東西に走る溝を検出した。標高は12m前後と、今までの調査中で最も高い位置にある。

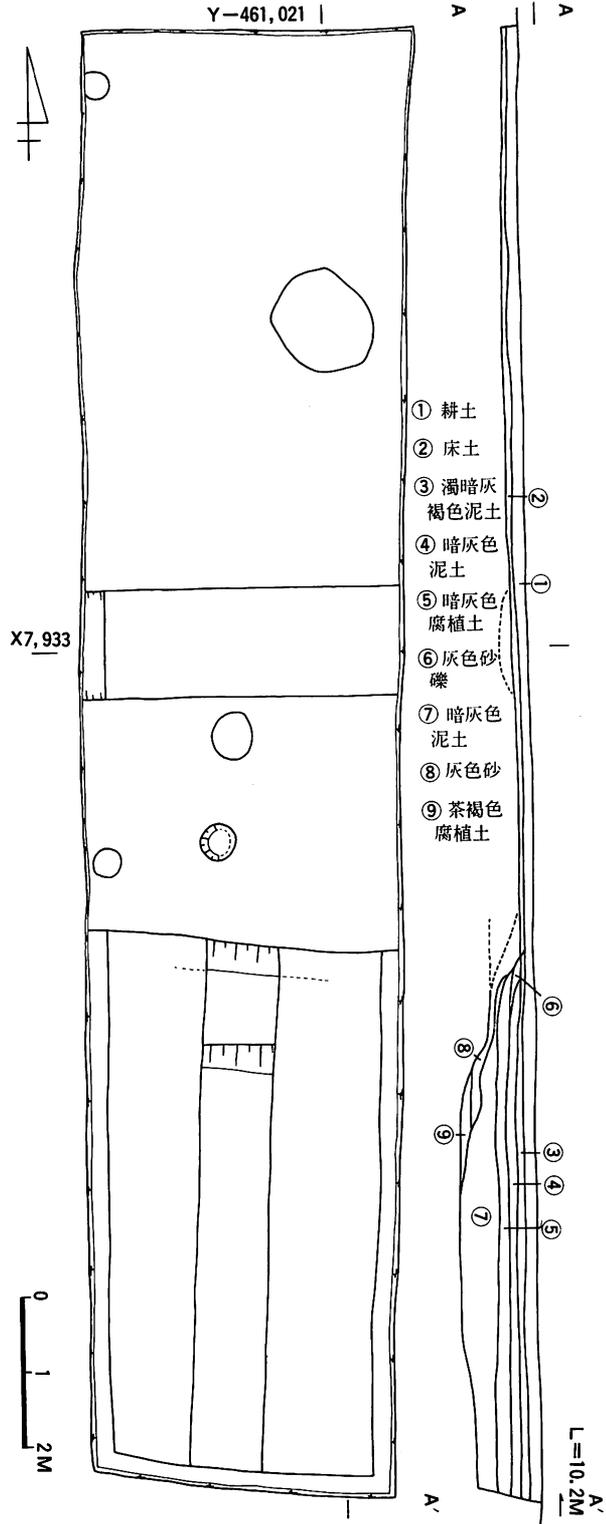


図6 試掘3 平面図

試掘 4

調査区Ⅶブロックは、小字西川原寺と呼ばれる地域で試掘4から7まで4箇所の試掘トレンチを設定した。

東端に位置する試掘4を、まず開始した。耕土・床土を除去した表土下20cmで、褐色砂泥層ないしは茶褐色砂泥層を確認した。これらの層を切り込んで、南北に通る幅20cm前後の溝を4本検出した。これら溝は、トレンチ北部で東方に向きを変えて一本となる。この4本の溝及び褐色砂泥の上部に薄く堆積する黄褐色泥土層より、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器等の遺物片を出土した。

これら遺構の標高は12.6mと、試掘3よりも更に高く位置し、街路調査区のうちで最も高い位置にある事が解った。

当トレンチで注目すべきことは、溝によって切り込まれる褐色砂泥層と茶褐色砂泥層の変化が、トレンチ中央で南北に明確に二分されることである。当地域が川原寺の地名を持つ事から、或いは、川原寺の遺構の一部とも推定でき、本調査での結果に期待したい。

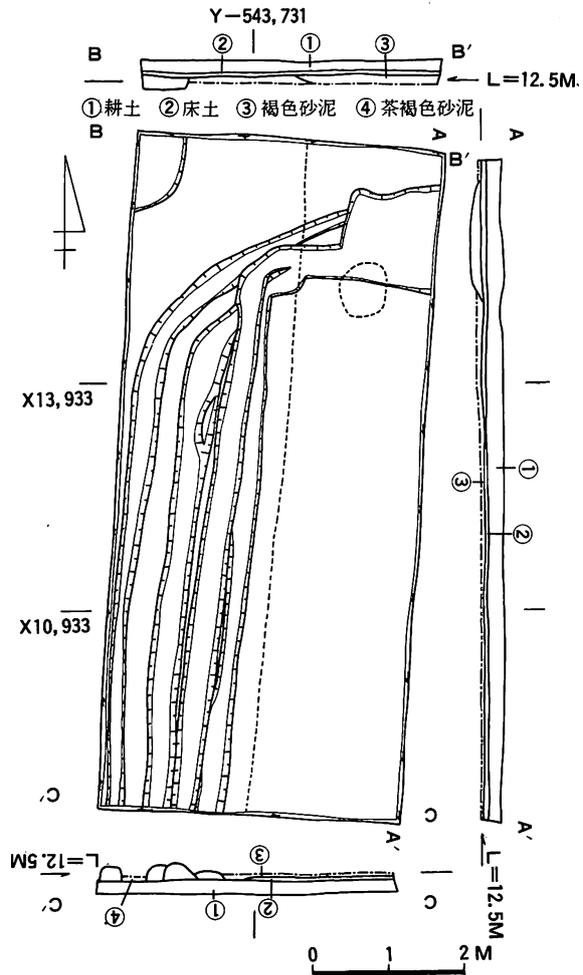


図7 試掘4 平面図

試掘 5

試掘5は、試掘4と同ブロックで北西約20mの位置に設定した。

耕土を除去すると、全体に茶褐色泥土層が見られ、この上面に、多量の遺物片の散布を確認した。遺物には、土師器・須恵器・緑釉陶器の土器等の他に、瓦・凝灰岩も含まれていた。これら遺物は、表土下20cm、標高12.7mで認められ、試掘4よりも更に高くなる。

当トレンチは、Ⅶブロックで実施した試掘4・6の中間にほぼ位置し、今回の試掘調査の中で最も遺物出土量が多い。このことは、当ブロックが街路調査区域中最も高い位置にあることと考え合わせると、川原寺と密接に結びつくと思われる。

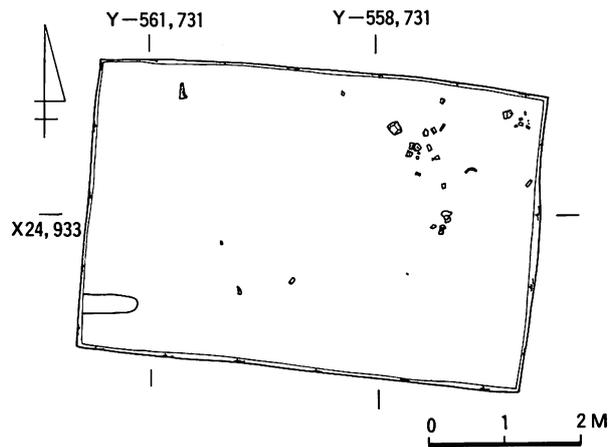


図8 試掘5 平面図

試掘 6

試掘6は、試掘4の西方約40mに設定し、試掘7の南東に当る。

調査の結果、試掘とほぼ同じような南北に通る溝を7本検出した。幅30~50cm、深さ20cm程度のものであった。この溝の堆積土からも、試掘4と同様、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器等の出土が見られた。この他の遺構として、上述の溝を切って土壇2個が検出された。更に、時期が不明である柱穴1個がトレンチ北東部で検出された。

これらの遺構は、淡黄灰色砂泥一部小砂礫層をベースとしてつくられ、表土下20cm、標高にして12.9mに位置する。

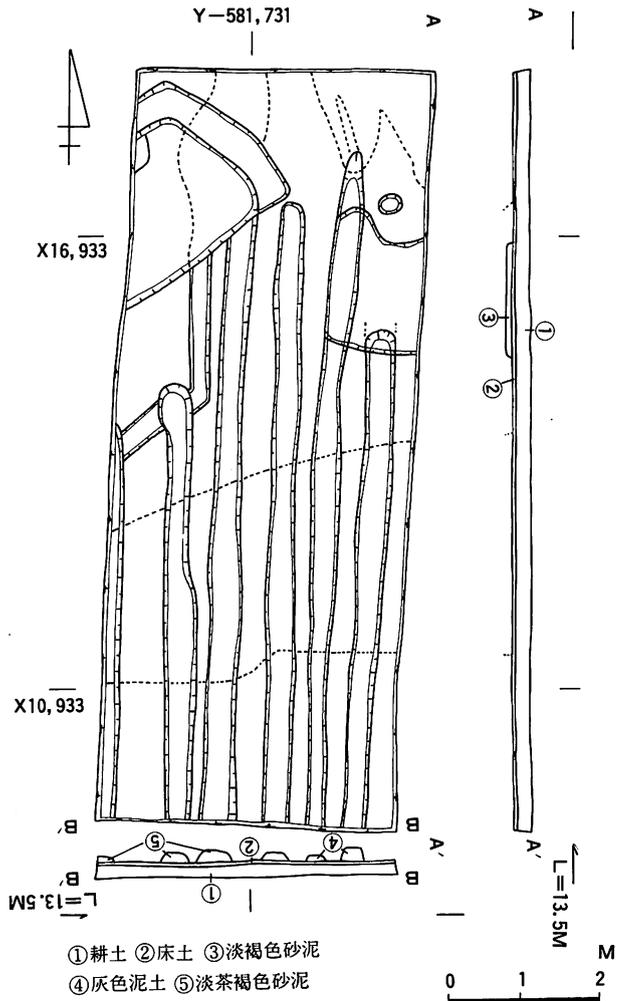


図9 試掘6 平面図

試掘 7

試掘7は、VIIブロックの西端に位置する水田で実施した。

耕土・床土を除去すると、暗灰色泥土・暗灰色砂泥が見られ、この下の濁茶褐色泥土を除去すると、茶褐色砂泥ないしは淡青灰色砂泥が見られ、これを切り込んで柱穴29個を検出した。

柱穴はトレンチ全体に分布し、径15~30cmを測り、根石状の石を有するもの、小礫で詰ったものも見られた。柱穴検出面は、表土下約40cm、標高12.7mであった。

出土遺物には、土師器・瓦器に混じって陶磁器を出土していることから、中世の柱穴群と思われる。

VIIブロックでは、試掘4から試掘7まで計4箇所のトレンチを設定したが、各トレンチから遺構・遺物が発見され、本調査に大きな期待を持つことが出来る。

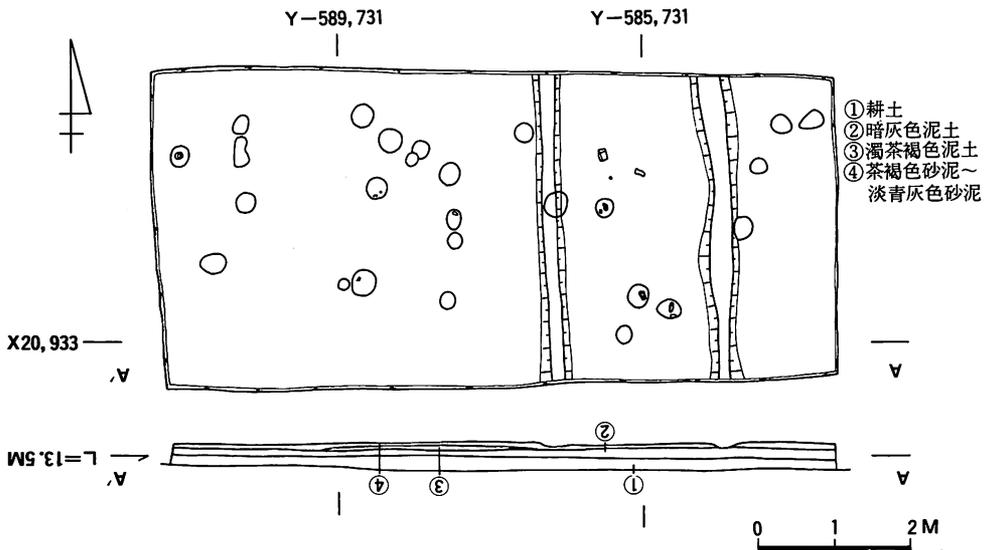


図10 試掘7 平面図

試掘 8

試掘8は、街路調査区の西端ブロックであるVIIIブロックに設置したトレンチである。VIIIブロックは、羽束師菱川町小字脇田と呼ばれる地域に当り、水田と宅地が半々の地域である。トレンチは、ブロックのほぼ中央に設けた。

耕土・濁暗灰色粘土・濁灰色泥土・淡灰色砂層と続き、ほぼ水平に見られた。この層の下に、褐色砂礫層が薄くブロック状に見られ、以下粗砂・細砂層の堆積があり、更にこの下に灰色粘土が見られた。灰色粘土面は、ほぼ水平で、表土下40cmの標高13.1mで見られた。

街路調査区の中で、上述の灰色粘土は最も高い位置でみられ標高も13.1mと、調査区の中で最も高い。これがどういう意味を持つものかは、当トレンチだけでは不明で、今後の本調査に期待したい。

出土遺物は、粗砂層より緑釉陶器皿を半分以上の破片で出土し、その他、土師器・須恵器片が見られた。

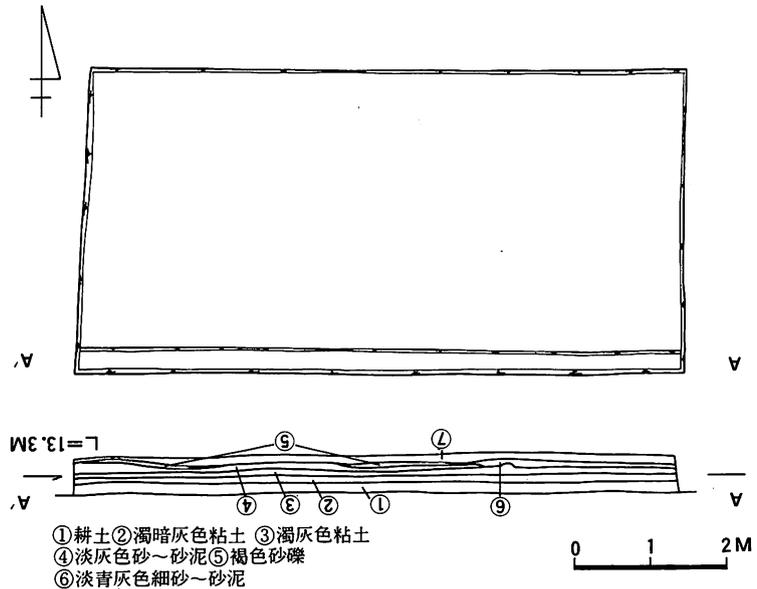


図11 試掘8 平面図

V まとめ

—戸籍断簡について—

戸籍の断簡は2例あり、いずれも二つ折りになった状態で発見された。破片は大きい方(紙片A)が9.5cm×13.6cm、小さい方(紙片B)は6.0cm×12.4cmの大きさである。文字は片面にだけ記され、裏面に茶褐色の漆が塗布されている。

大きい方の破片には、次のように記されている。

□	女	男	男	男	男	□
	志	志	志	志	志	尾
	斐	斐	斐	斐	斐	張
	連	連	連	連	連	連
	宅	嶋	嶋	矢	弓	宇
	女	□ _(係)	守	麻	麻	随
	年	年	年	呂	呂	麻
	貳	拾	拾	年	年	呂
	拾	貳	肆	貳	貳	年
	參	茂	茂	拾	拾	貳
□	茂			壹	貳	拾
				□	茂	伍
						茂
□	丁	小	小	進	□	正
□	女	子	子	正	丁	□
				丁		

紙片A

	十	
四	三	位
人	人	
耆	小	十
女	女	五
		人
	一	小
	人	子
	緑	
	女	二
		人
		緑
		子

紙片B

小さい方の破片は文字の大部分は欠失して、残っている部分は下方の一部だけである。書かれている文字は百十三字あり、八人の男女の姓、性別、年令と、家族の数などが書

かれている。男子斐連矢麻呂年二拾壹の下に「進正丁」という文字があり、21歳で正丁になったことを記入している。正丁の年齢は天平宝字元年に22歳以上に変更になっているので、この戸籍の作製年代が天平宝字元年（757）より古いことを示している。また、戸籍は30年間保存されるのが通例であるため、この断簡が放棄された790年頃より30年さかのぼると760年頃以前になり、「進正丁」の記述が757年以前のものであることを考えあわせると、天平勝宝4年（752）に製作された戸籍である可能性がある。この戸籍は復古として再利用され、この際に漆が付着したものであろう。同様な例は平城宮跡や多賀城跡でも発見されているが、今回発見された戸籍断簡より新しいものである。

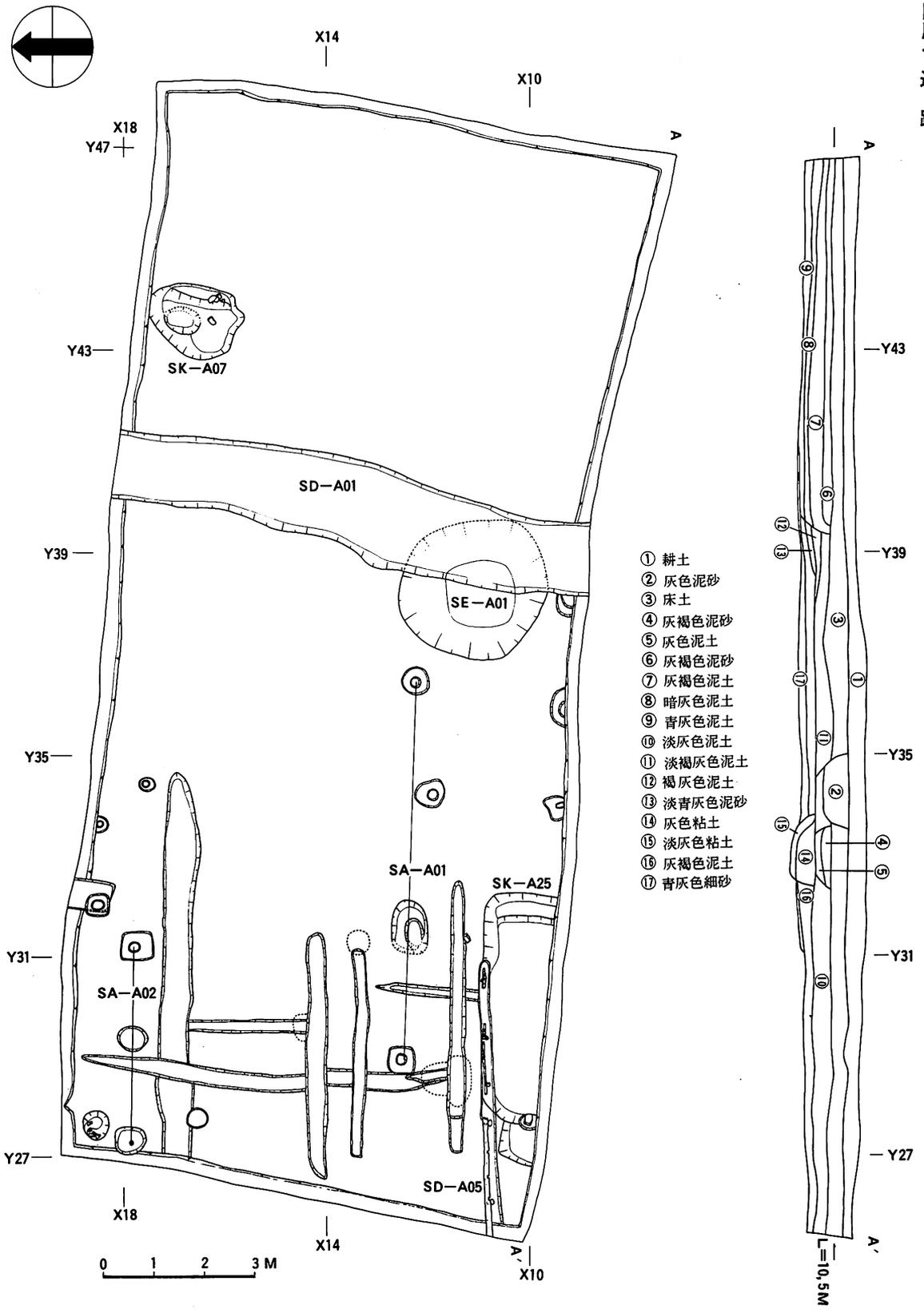
戸籍の解説は、岸俊男（京都大学教授）、狩野久（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部長）にいただいた。

一まとめ一

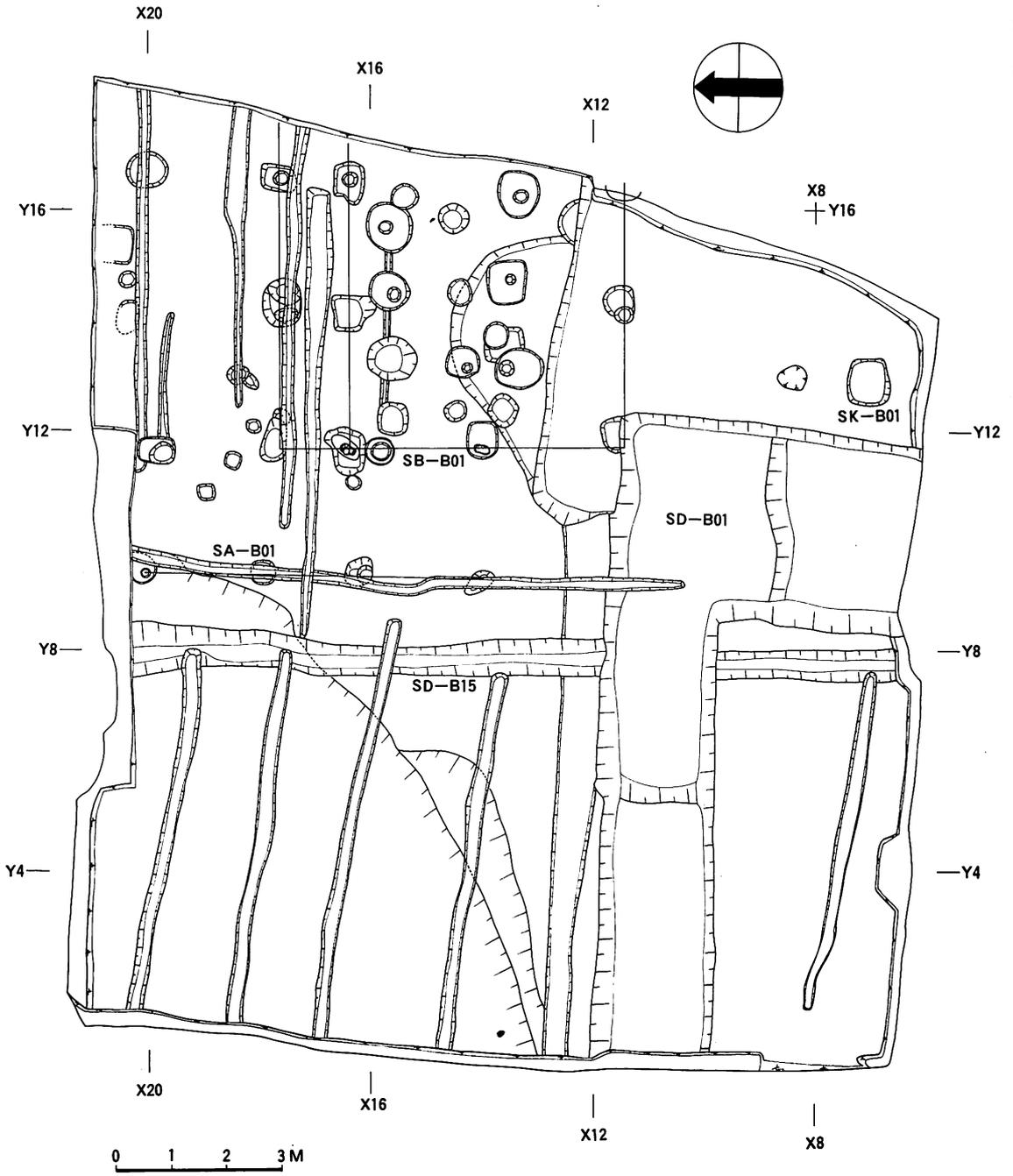
調査の経緯で述べたように、今年度調査は計画道路の東3分の1程度の発掘調査を終了したわけである。発掘調査で最も大きな成果として上げられることは、上述した戸籍断簡の発見であろう。極く小さな土壇から貴重な歴史資料が得られるという好例であろう。またその逆に、長岡京というような都城遺跡は、できる限りの広範囲な調査が必要で、当調査は、一定の幅の中ではあるが、東西に連続して調査が実施できる点で、条坊制の遺構を知る上で絶好なものであった。今回の調査では、東三坊大路東側溝、これより一本東を南北に通る小路の両側溝を検出することができ、近辺の資料と合わせて当地域の条坊制の推定をより現実のものとすることができた。

一方長岡京の遺構の下層に弥生時代後期から古墳時代にかけての明確な遺構を検出することができた。竪穴住居址1戸を初めとして、大小の溝・土壇を数多く発見した。このことは、羽東師遺跡が従来の古墳時代のものではなく、弥生時代後期から引続くものでありその範囲もより広く展開していくことを知り得た。

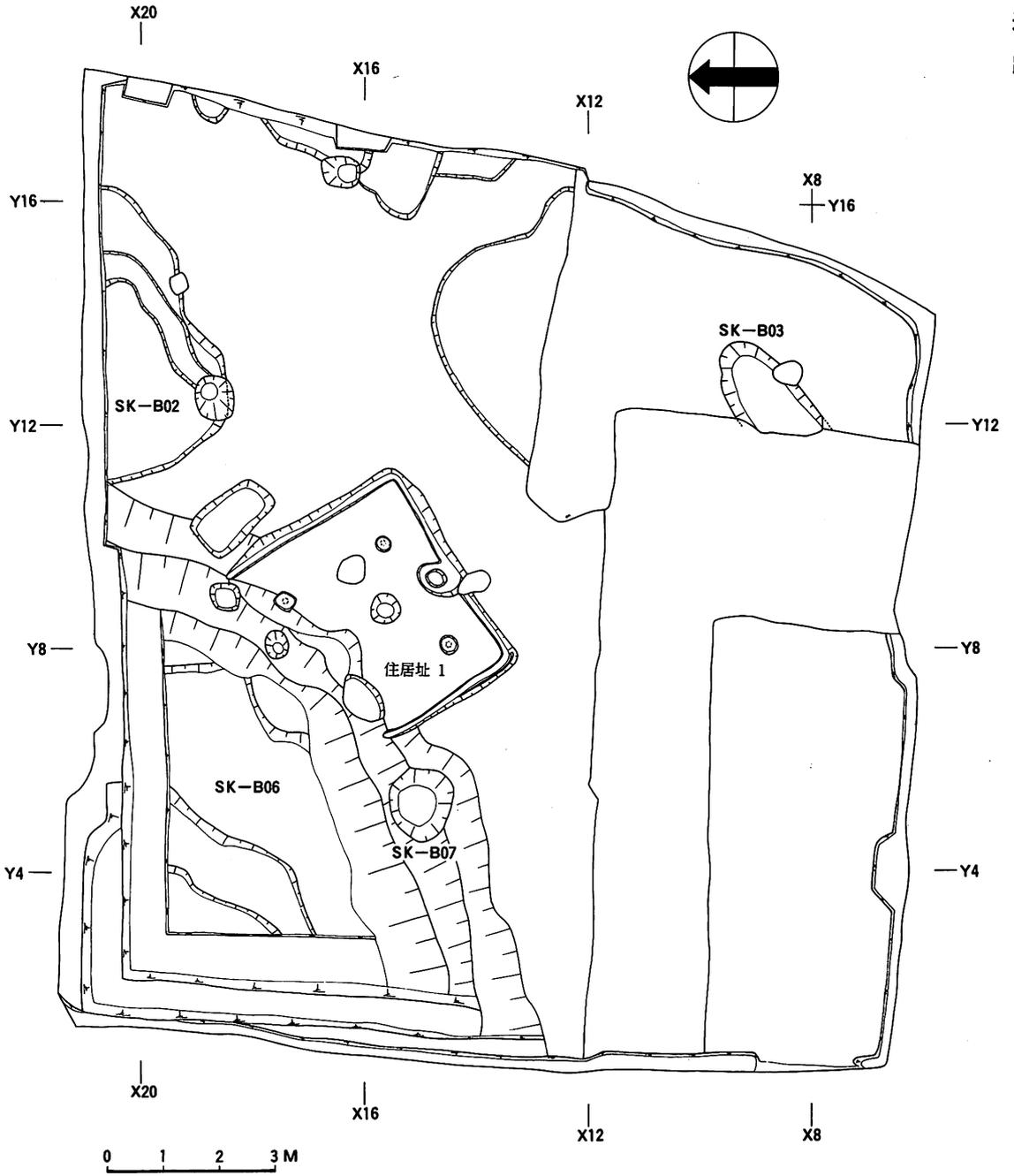
さて来年度以後の発掘調査の状況を推測するために設定した試掘調査箇所8箇所の成果は、試掘1・2が今年度発掘調査地とほぼ同一の状況を見たのに反し、試掘3～7では耕作土直下に遺構および遺物包含層がみられ、当一帯で最も高所な位置に当たることがわかった。この箇所が推定川原寺とほぼ一致することから、川原寺が当高台に築かれた可能性が大きく、来年度以後の調査では、この川原寺の遺構およびその関連遺跡が明確になってくるものと思われる。



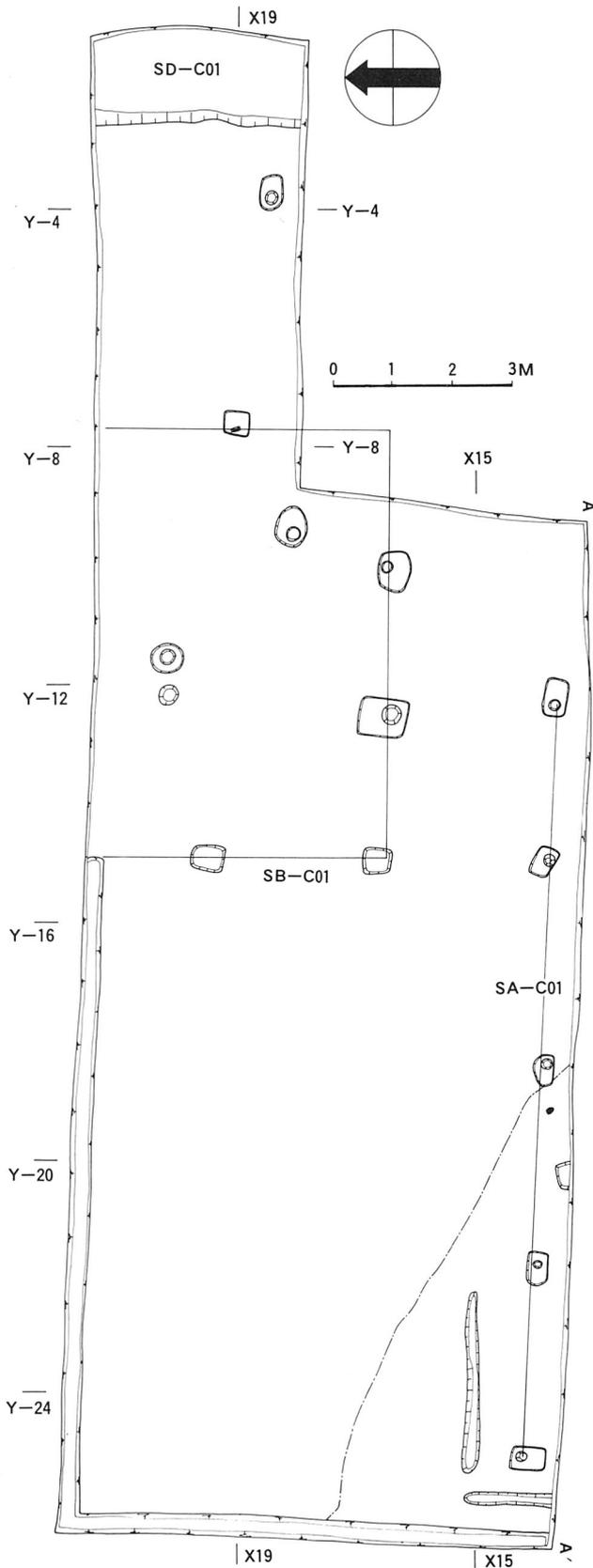
A区 遺構平面図 (長岡京期)



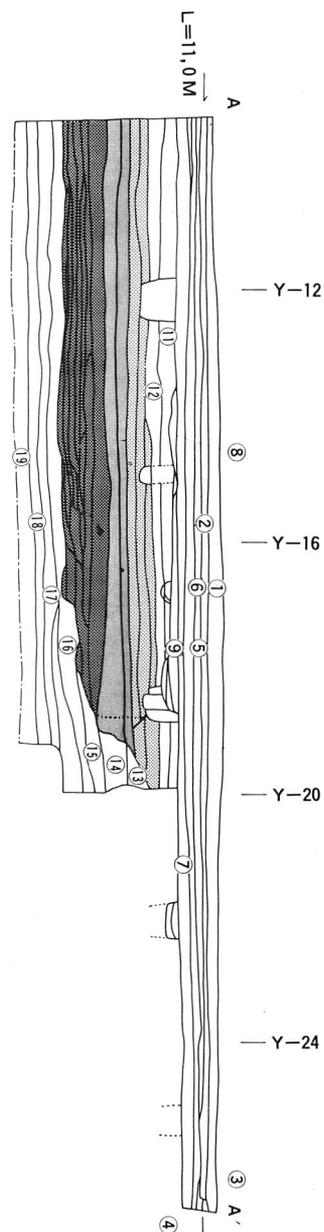
B区 遺構平面図（長岡京期）



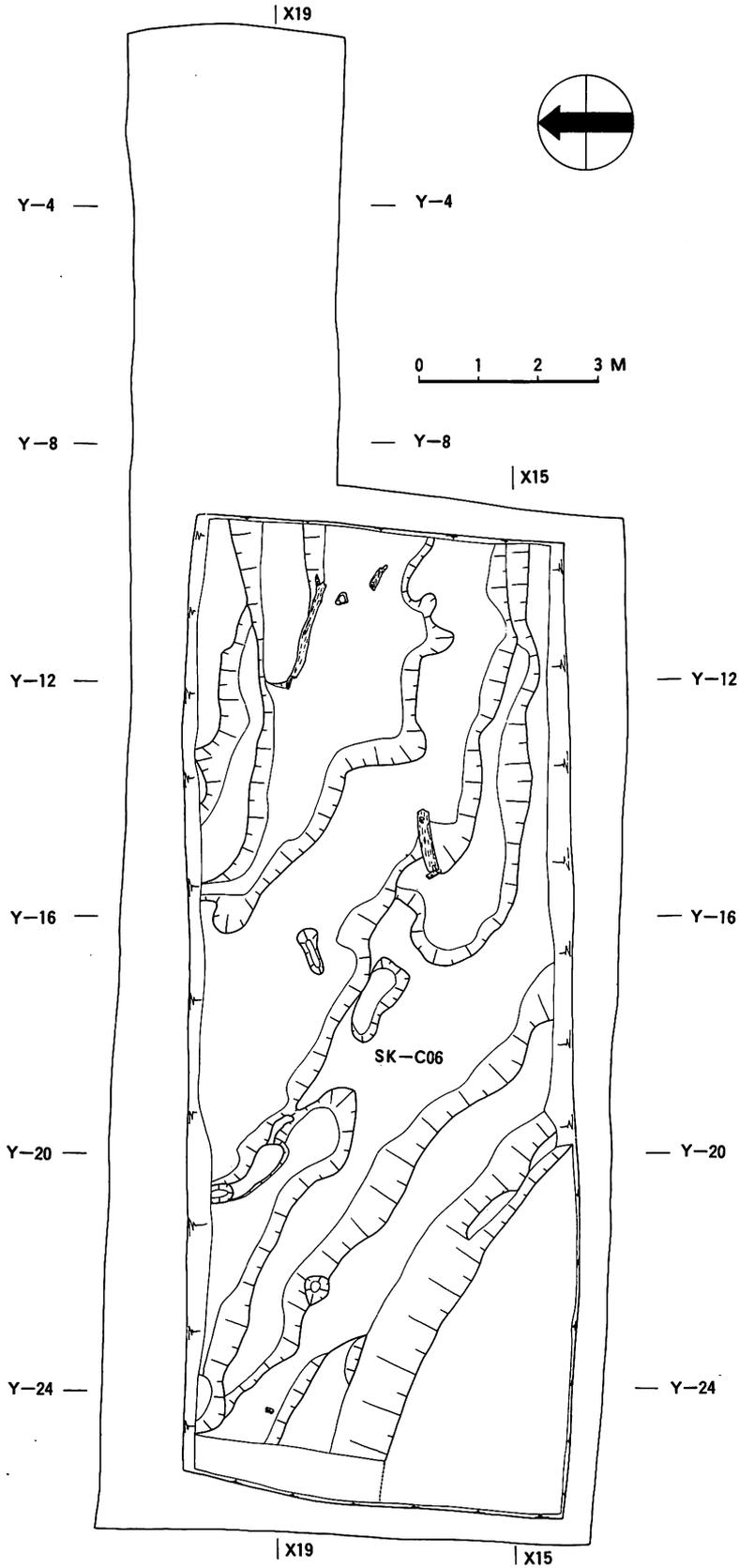
B区 遺構平面図（長岡京期以前）



- | | | |
|--------------|--------------------|---------------|
| ① 耕土 | ② 淡灰黄褐色土 | ③ 灰褐色泥土 |
| ④ 淡黄灰色土 | ⑤ 淡灰黄褐色土(微砂、小礫を含む) | |
| ⑥ 黄灰褐色土 | ⑦ 黄灰褐色土 | ⑧ 黄褐色土(微砂を含む) |
| ⑨ 黄褐色(微砂を含む) | ⑩ 灰色砂泥(Pit) | |
| ⑪ 褐灰色泥砂土 | ⑫ 灰褐色粘土 | ⑬ 黄褐色粘土(地山) |
| ⑭ 淡黄灰色粘土(地山) | ⑮ 淡青灰色粘土(地山) | |
| ⑯ 淡緑灰色粘土(地山) | ⑰ 淡緑灰色粘土(地山) | |
| ⑱ 暗褐色粘土(地山) | ⑲ 暗褐色腐植粘土(地山) | |
- SK-C06(奈良時代堆積層)
 ■ SK-C06(古墳時代前期堆積層)
 ■ SK-C06(弥生時代から古墳時代初期堆積層)



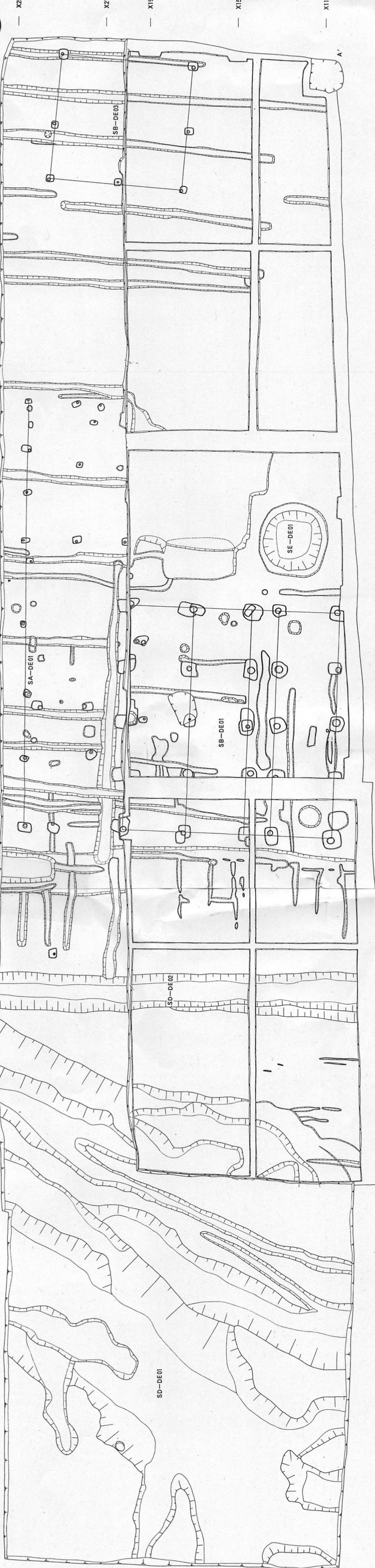
C区 遺構平面図(長岡京期)



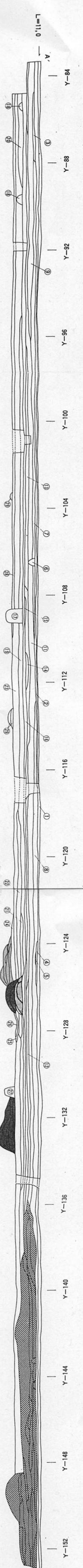
C区 遺構平面図 (長岡京期以前)



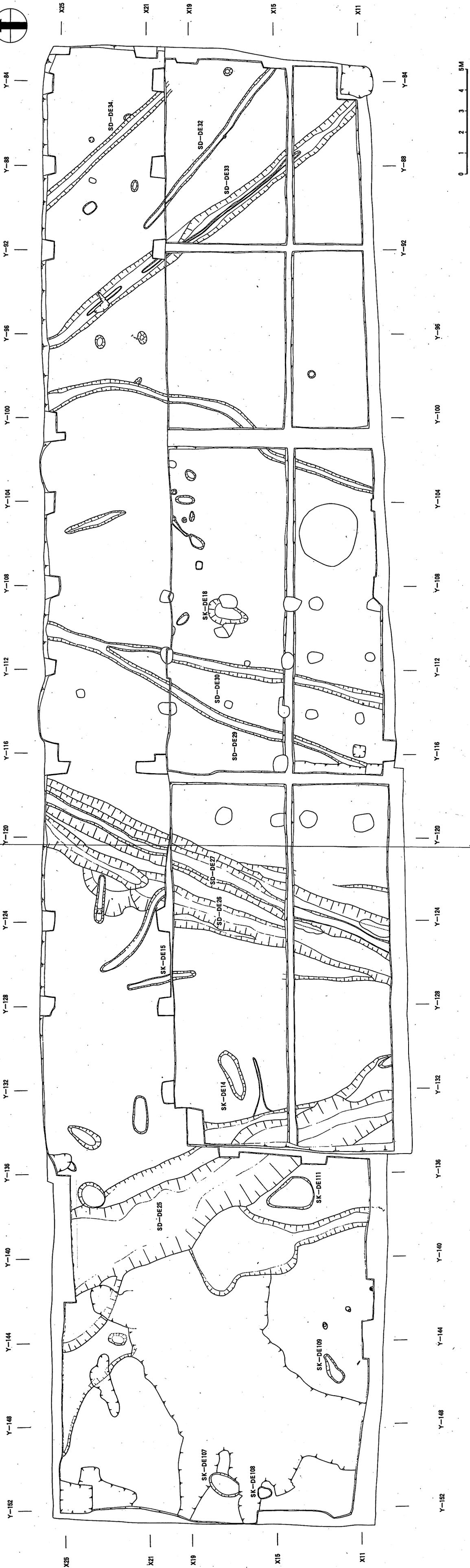
Y-152 Y-148 Y-144 Y-140 Y-136 Y-132 Y-128 Y-124 Y-120 Y-116 Y-112 Y-108 Y-104 Y-100 Y-96 Y-92 Y-88 Y-84



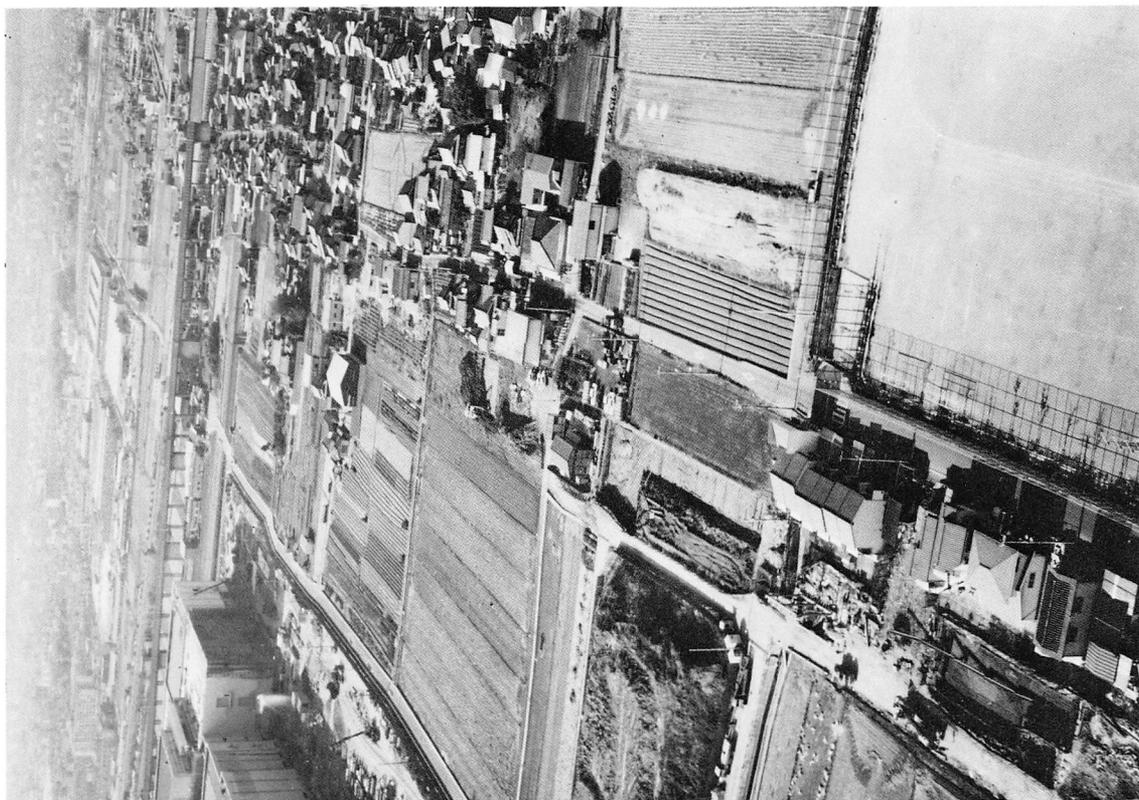
- ① 粘土
- ② 床土
- ③ 暗褐色砂(炭化物を多く含む)
- ④ 暗褐色砂泥
- ⑤ 暗褐色微砂
- ⑥ 褐灰色微砂(炭化物を多く含む)
- ⑦ 暗黄色微砂
- ⑧ 灰黄色砂泥
- ⑨ 黄灰色泥砂
- ⑩ 暗褐色微砂
- ⑪ 暗褐色微砂
- ⑫ 暗褐色微砂
- ⑬ 暗褐色微砂
- ⑭ 暗褐色微砂
- ⑮ 暗褐色微砂
- ⑯ 暗褐色微砂
- ⑰ 暗褐色微砂
- ⑱ 暗褐色微砂
- ⑲ 暗褐色微砂
- ⑳ 暗褐色微砂
- ㉑ 暗褐色微砂
- ㉒ 暗褐色微砂
- ㉓ 暗褐色微砂
- ㉔ 暗褐色微砂
- ㉕ 暗褐色微砂
- ㉖ 暗褐色微砂
- ㉗ 暗褐色微砂
- ㉘ 暗褐色微砂
- ㉙ 暗褐色微砂
- ㉚ 暗褐色微砂
- ㉛ 暗褐色微砂
- ㉜ 暗褐色微砂
- ㉝ 暗褐色微砂
- ㉞ 暗褐色微砂
- ㉟ 暗褐色微砂
- ㊱ 暗褐色微砂
- ㊲ 暗褐色微砂
- ㊳ 暗褐色微砂
- ㊴ 暗褐色微砂
- ㊵ 暗褐色微砂
- ㊶ 暗褐色微砂
- ㊷ 暗褐色微砂
- ㊸ 暗褐色微砂
- ㊹ 暗褐色微砂
- ㊺ 暗褐色微砂
- ㊻ 暗褐色微砂
- ㊼ 暗褐色微砂
- ㊽ 暗褐色微砂
- ㊾ 暗褐色微砂
- ㊿ 暗褐色微砂



DE区 遺構平面図 (長岡京期)



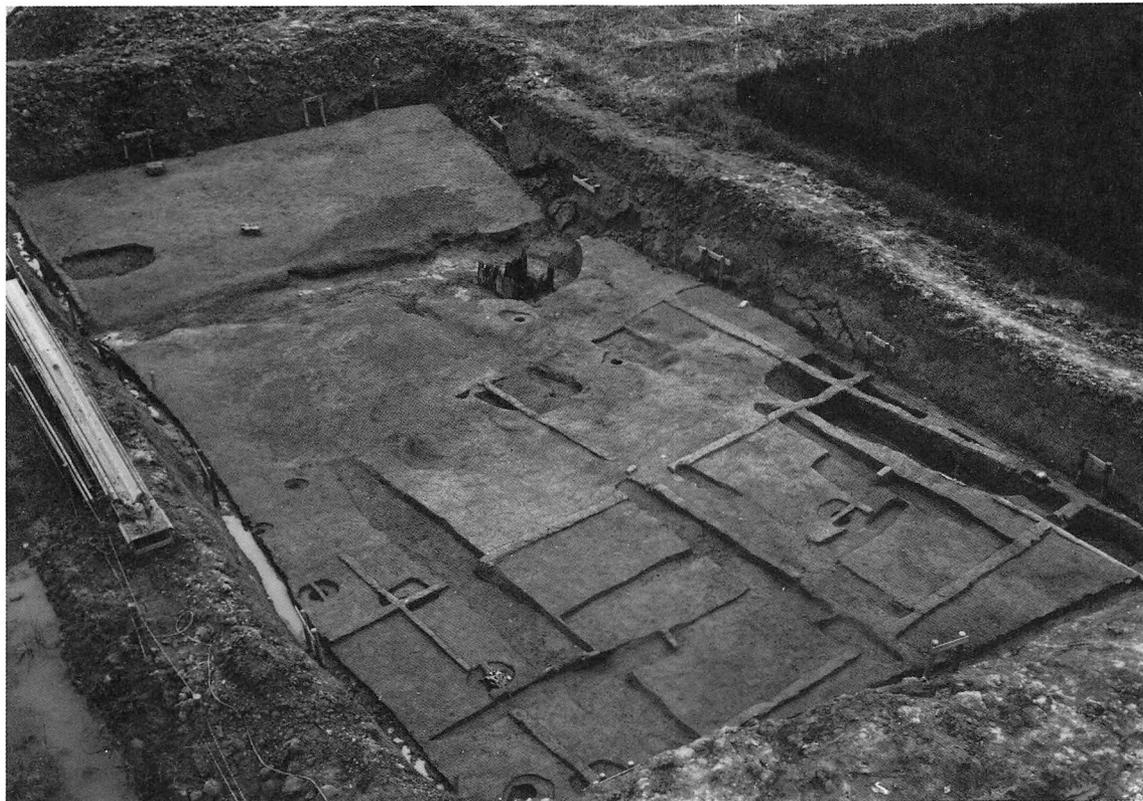
D.E区 遺構平面図 (長岡京期以前)



② 航空写真（東より）



① 航空写真（西より）



① A区全景



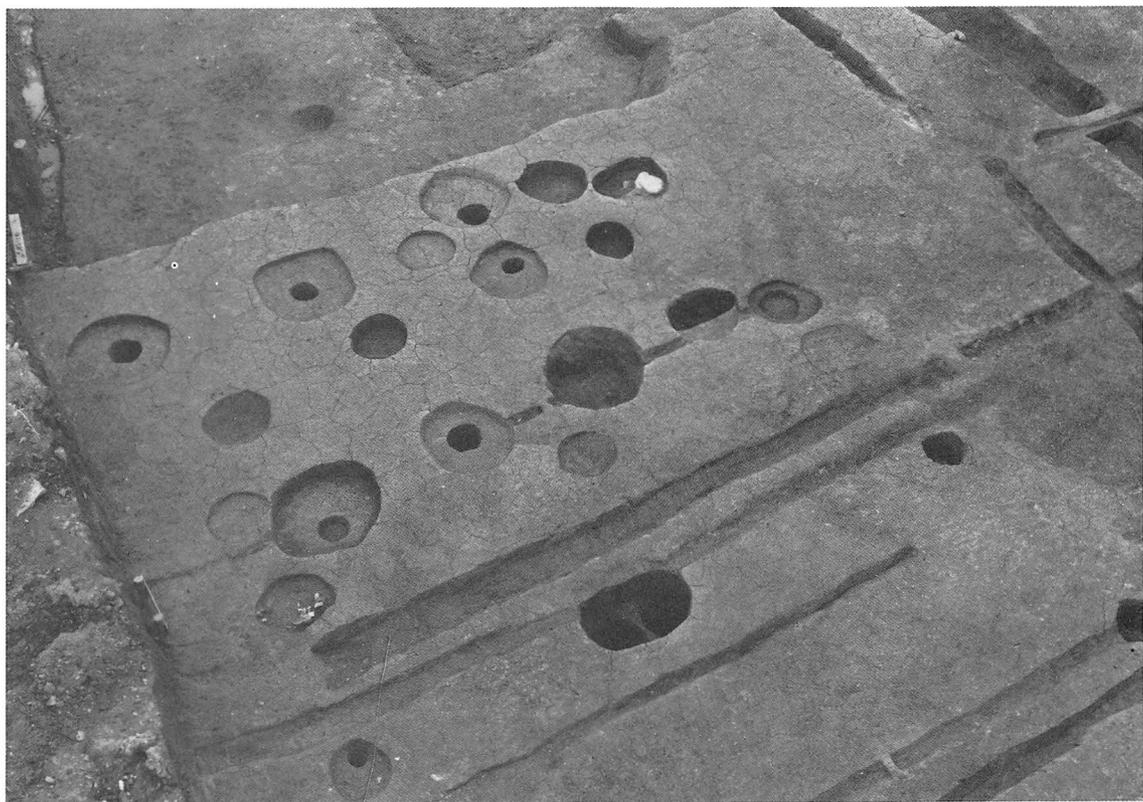
② SE-A01



③ SE-A01



① B区全景



② SB-B01



① SK-B01 全景



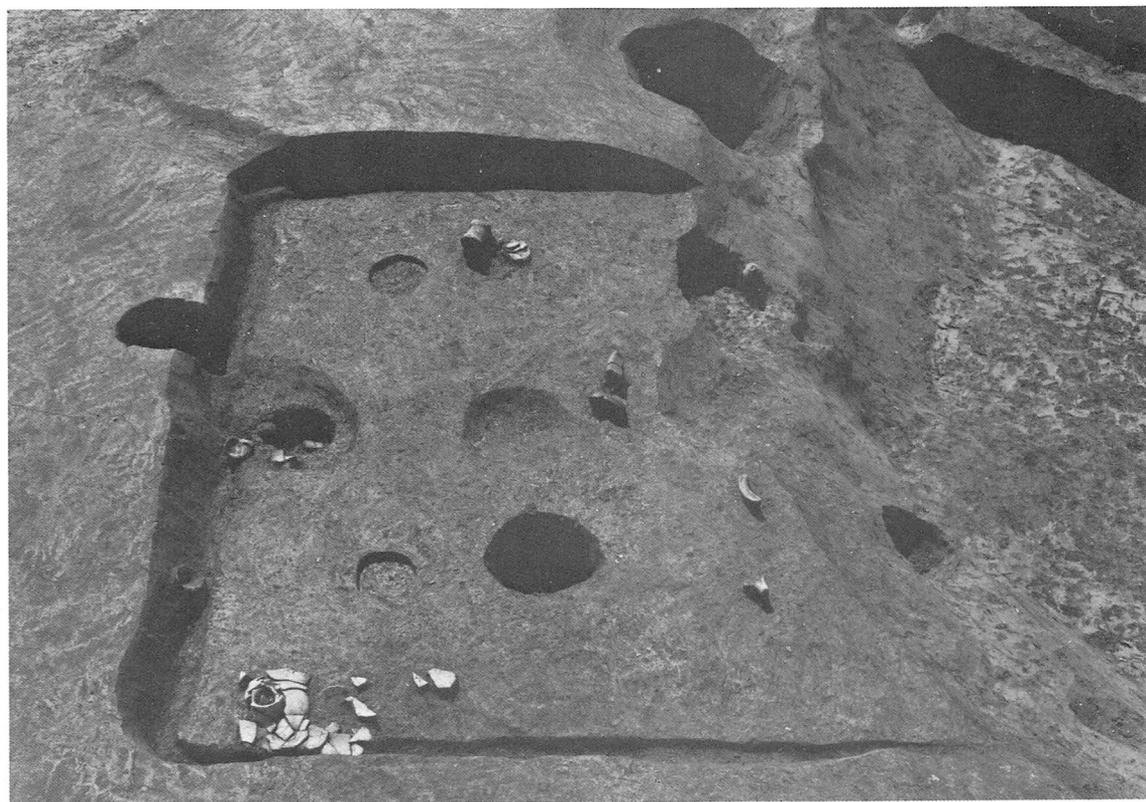
② SK-B01 紙片出土状況



③ SK-B01 紙片出土状況



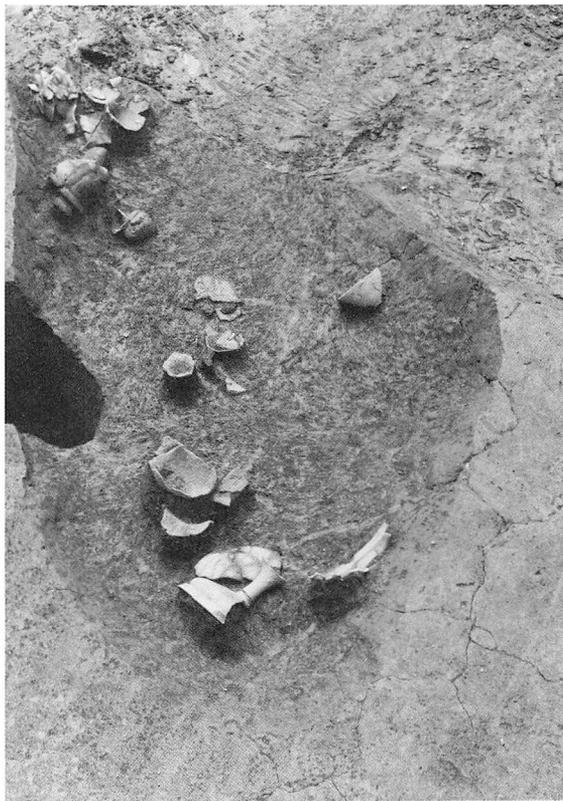
① B区全景（長岡京以前）



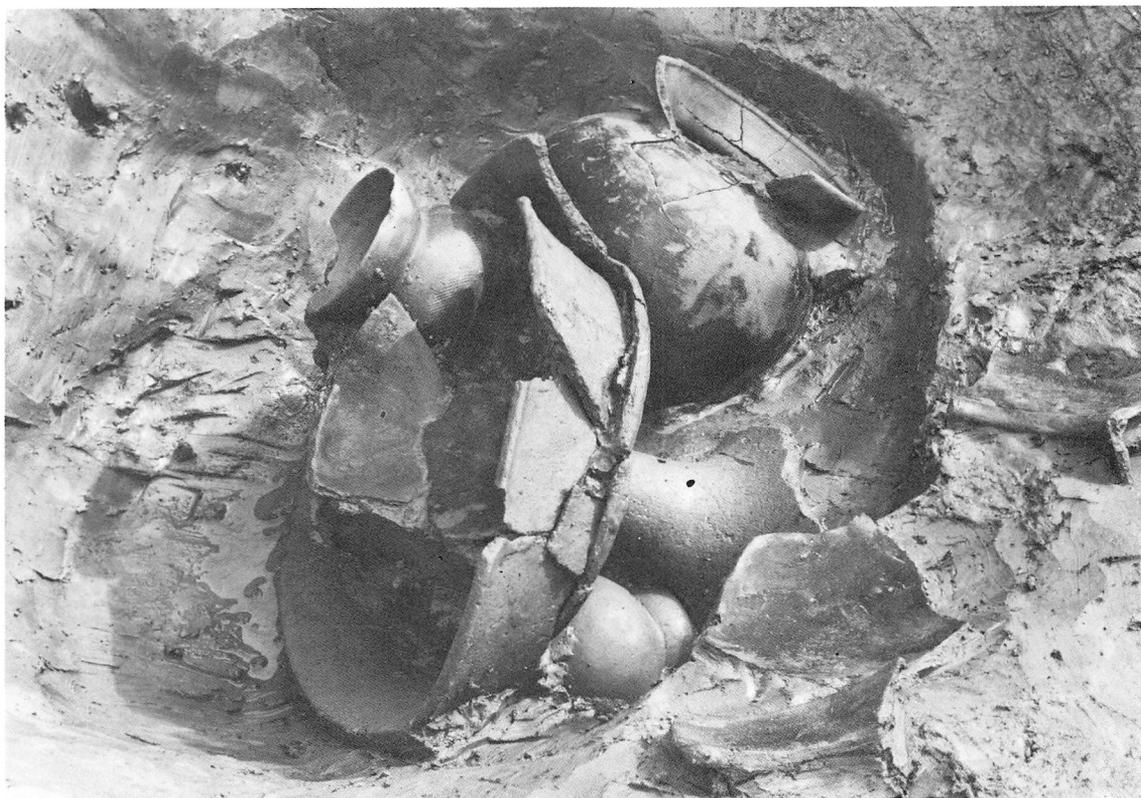
② 住居址-B01



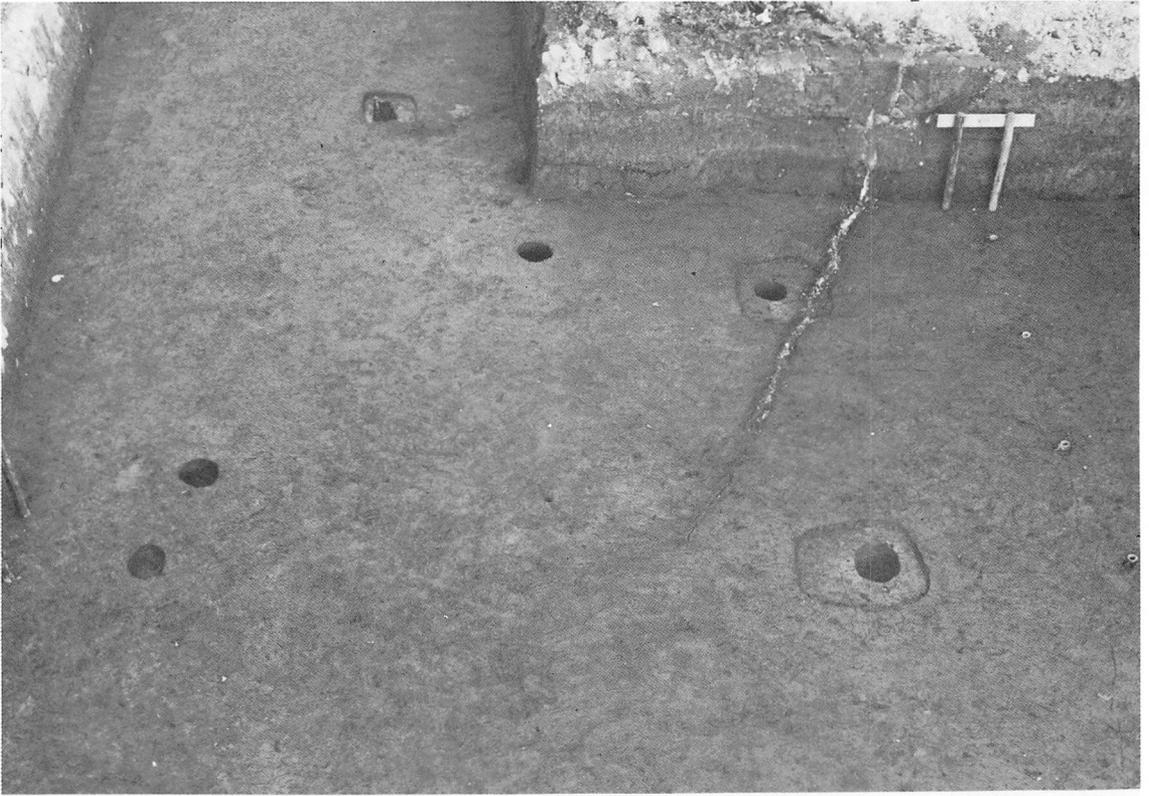
① 住居址-B01 土器出土狀況



② SK-B03



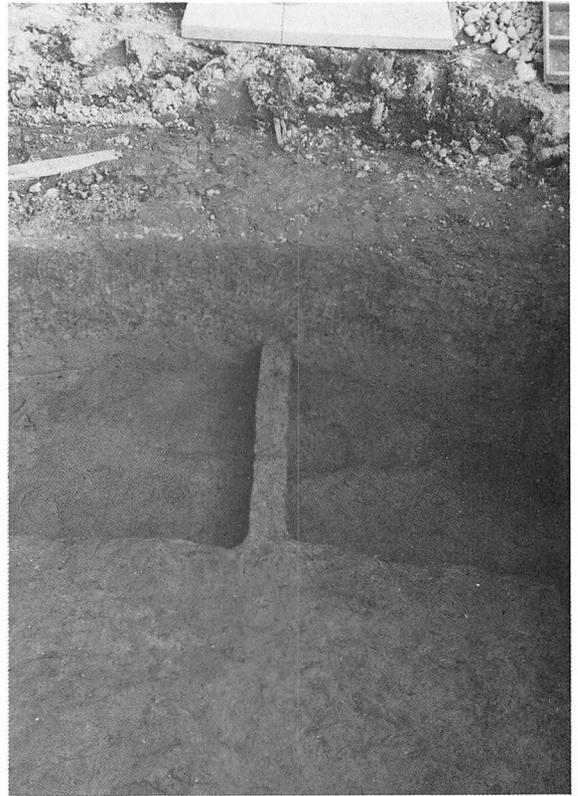
③ SK-B07



① SB-C01



② SA-C01



③ SD-C01



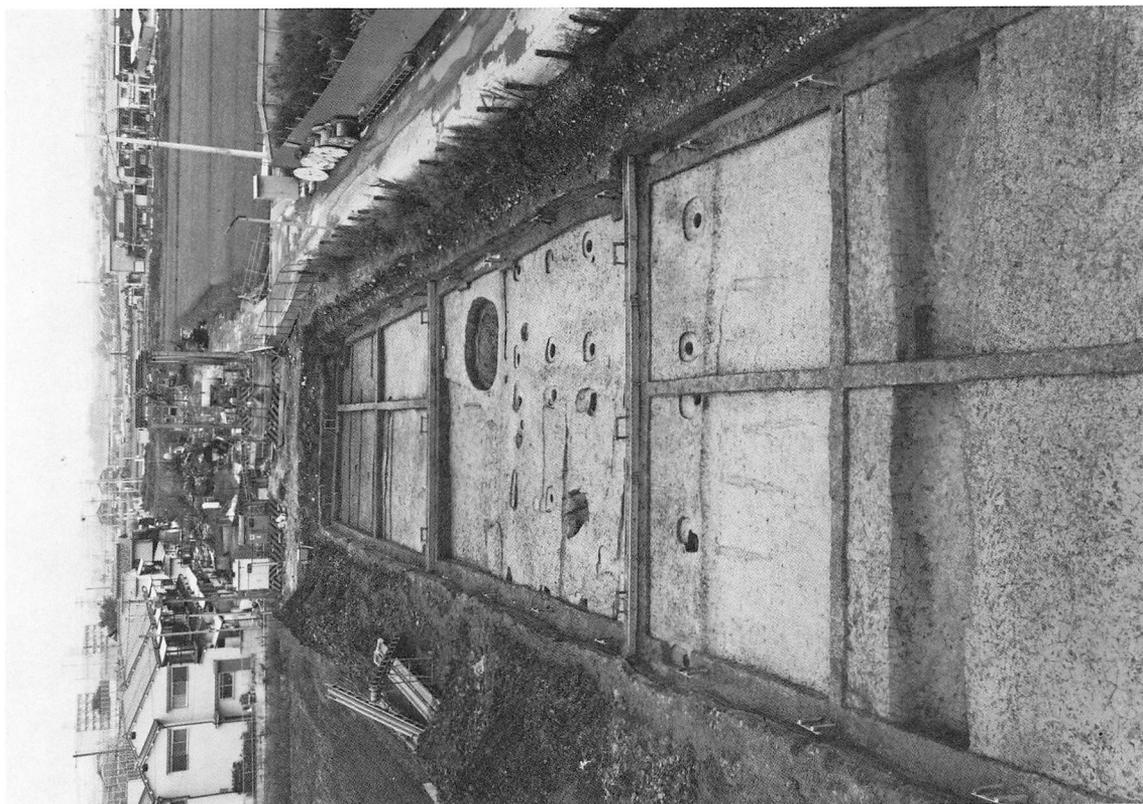
① C区全景（長岡京以前）



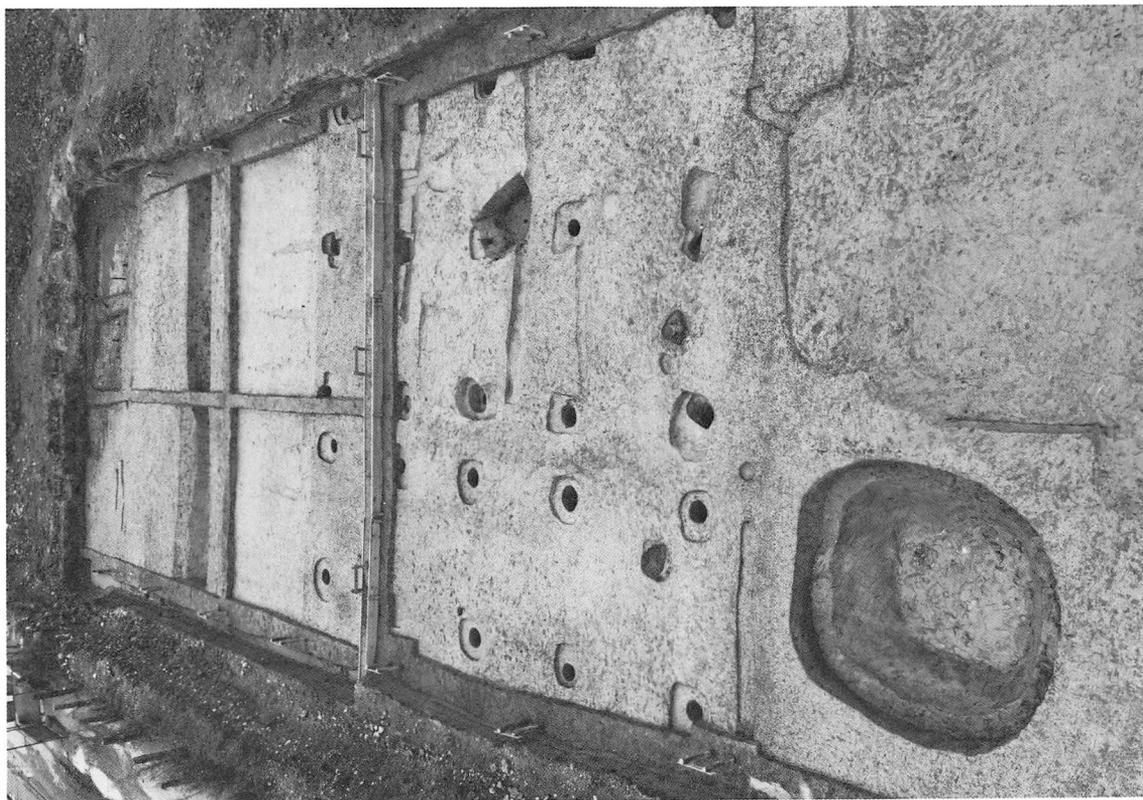
② C区SK-C06土器出土状況



③ C区SK-C06土器出土状況



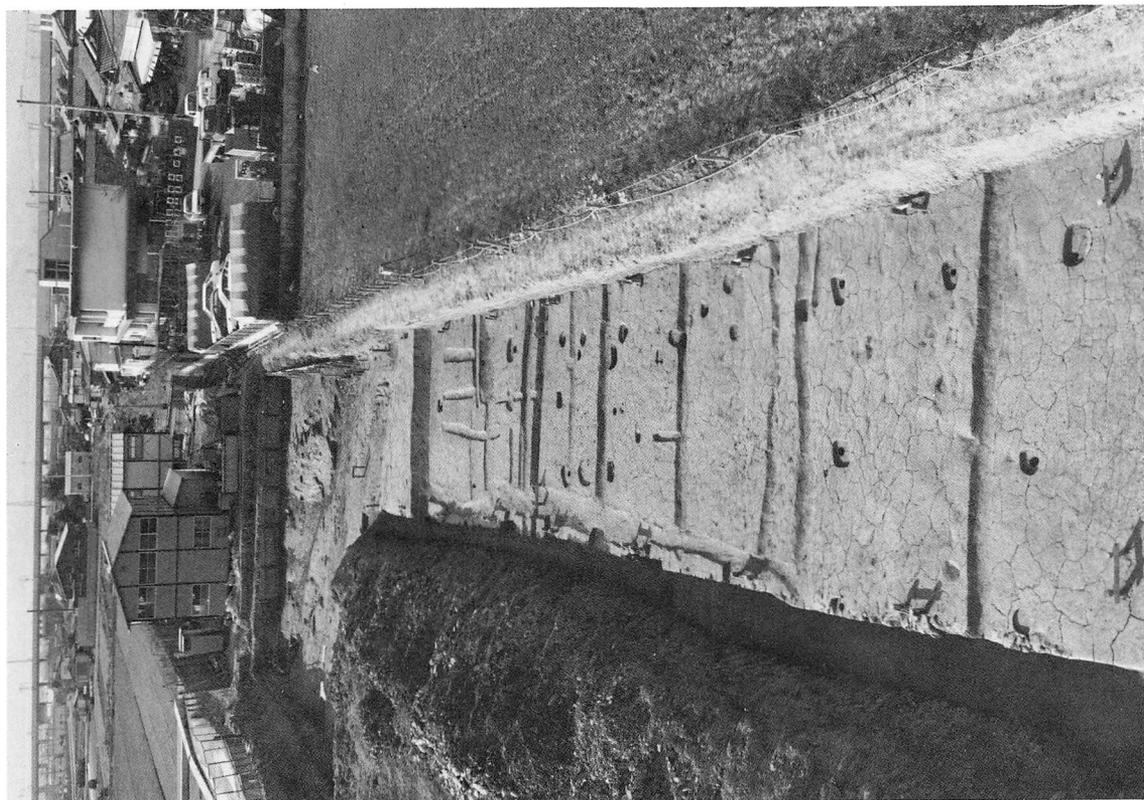
① D区全景



② D区SB-DE01・SE-D01



② E区全景（西より）



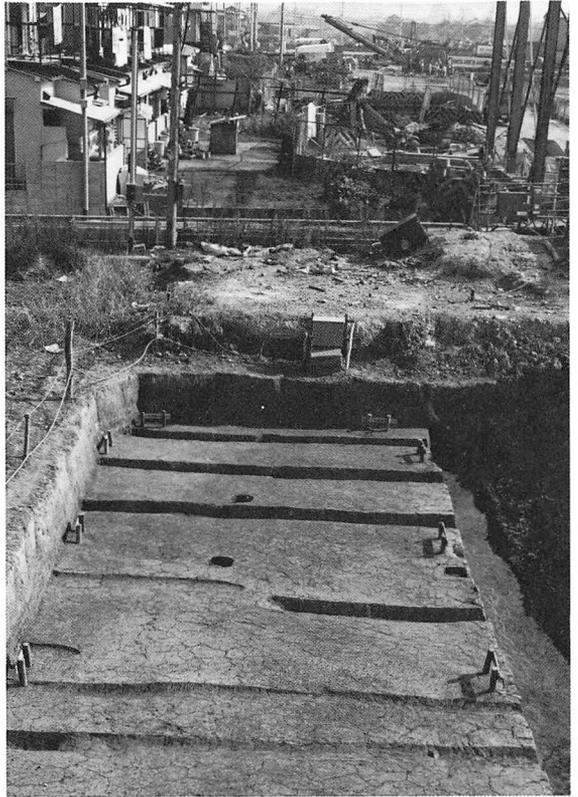
① E区全景（東より）



① SD-DE01



② SB-DE03 (D区)



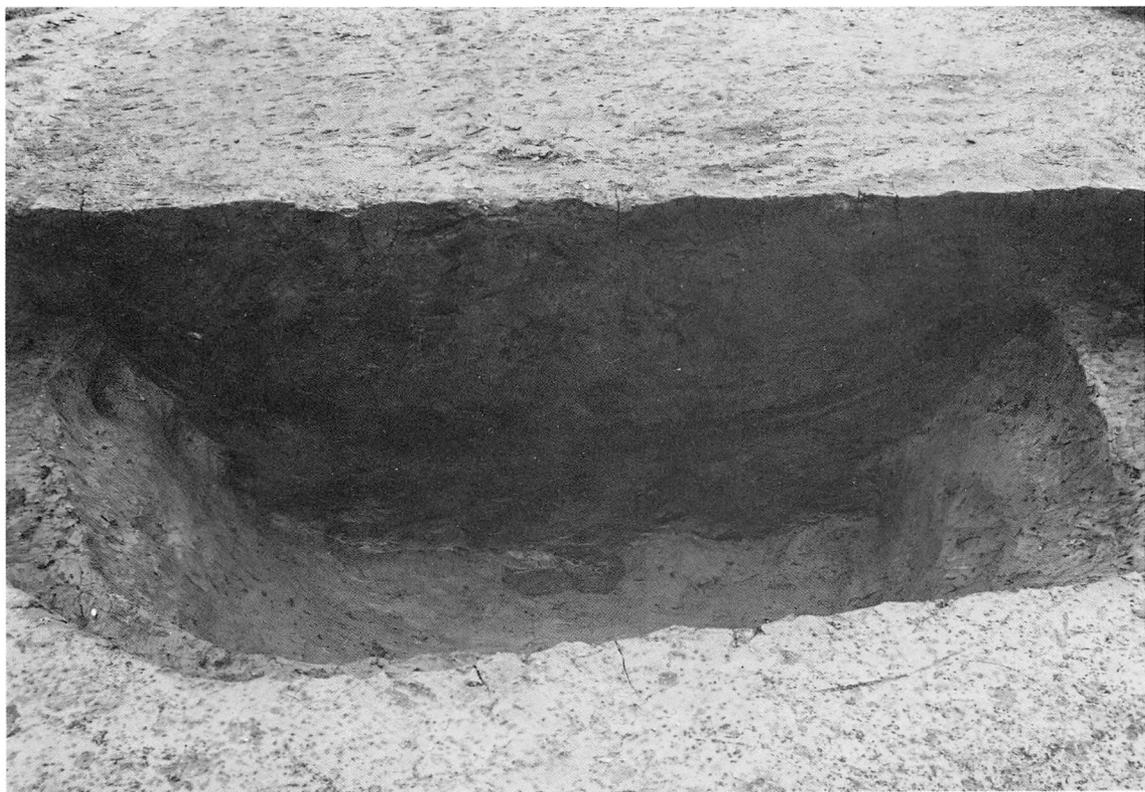
③ SB-DE03 (E区)



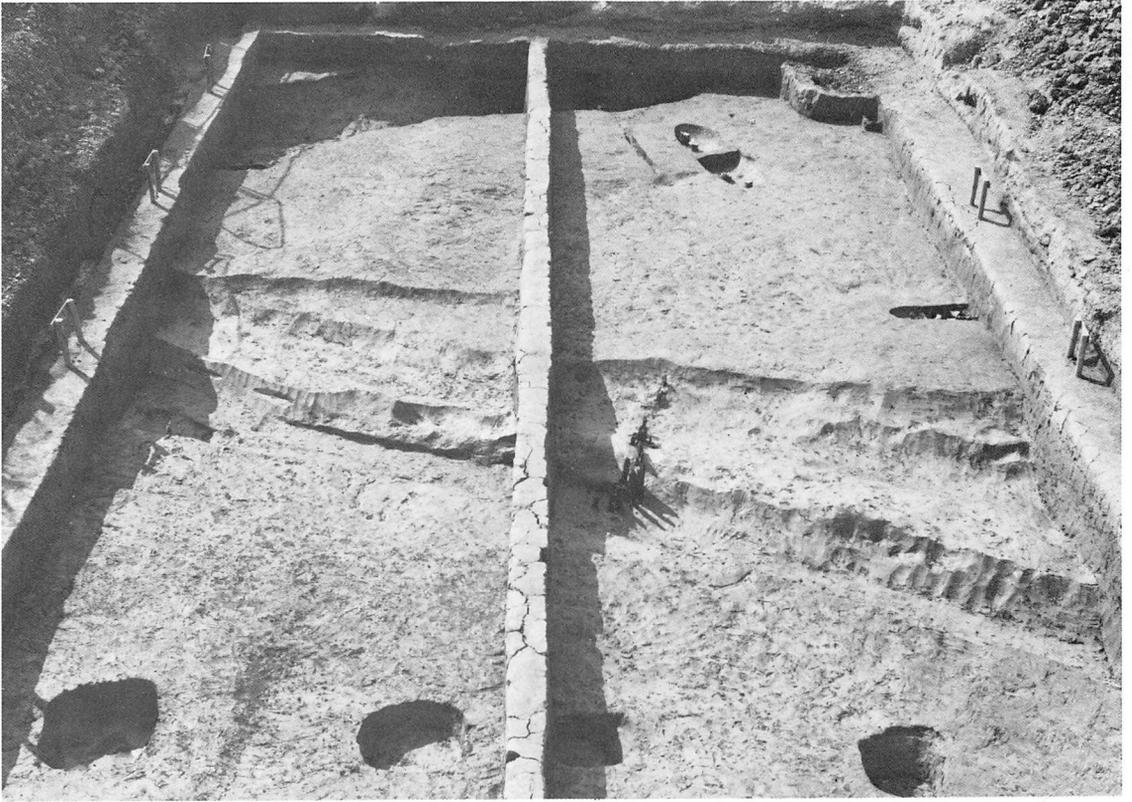
① 柱根



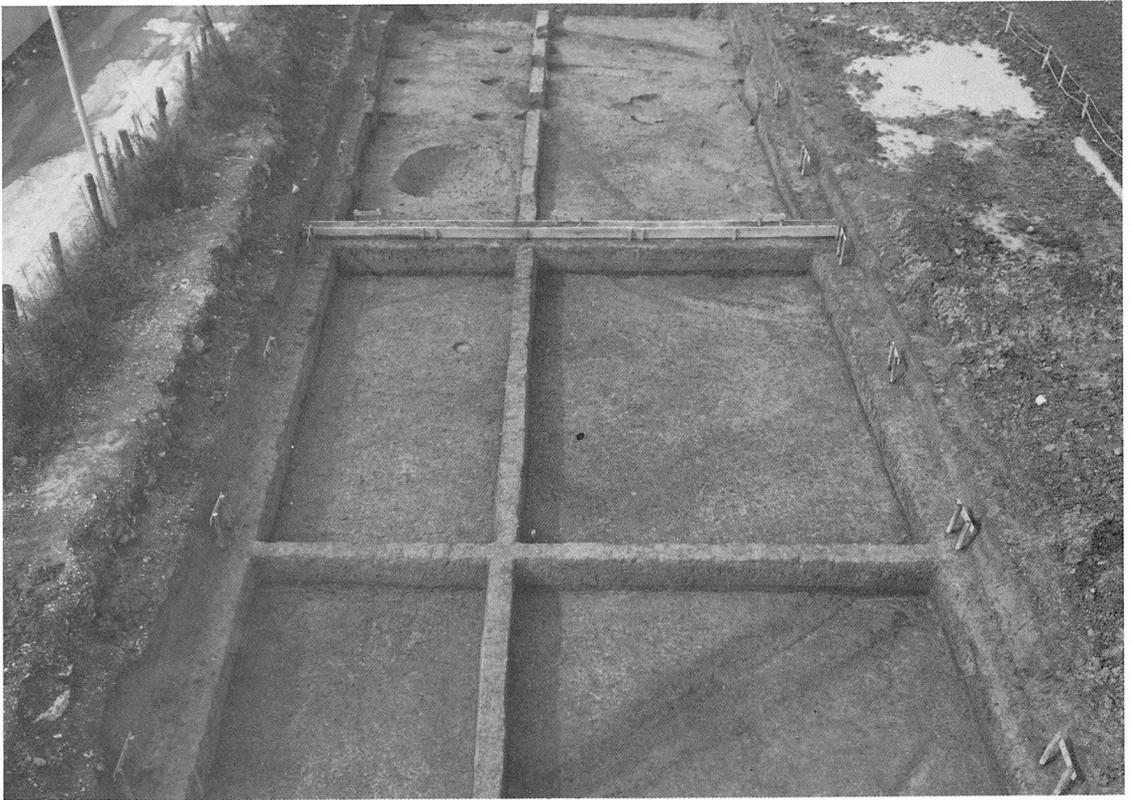
② 柱断面



③ SE-DE 01 断面



① D区西部全景（長岡京以前）



② D区中・東部全景（長岡京以前）



① E区全景（長岡京以前）



② E区SD-25



③ DE区SD-26・27



① SK-DE14



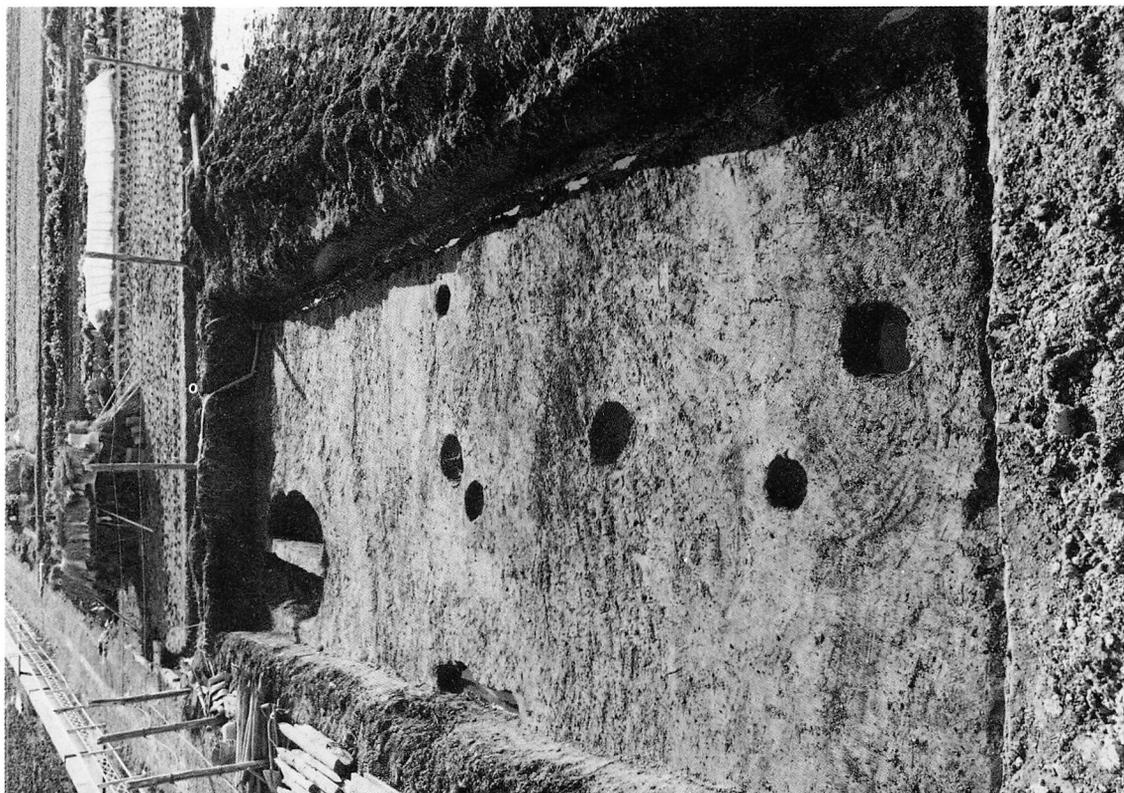
② SK-DE15



③ SK-DE18



④ SK-DE111



① 試掘 1 全景



② 試掘 2 全景



① 試掘 3 全景



② 試掘 4 全景



① 試掘 5 全景



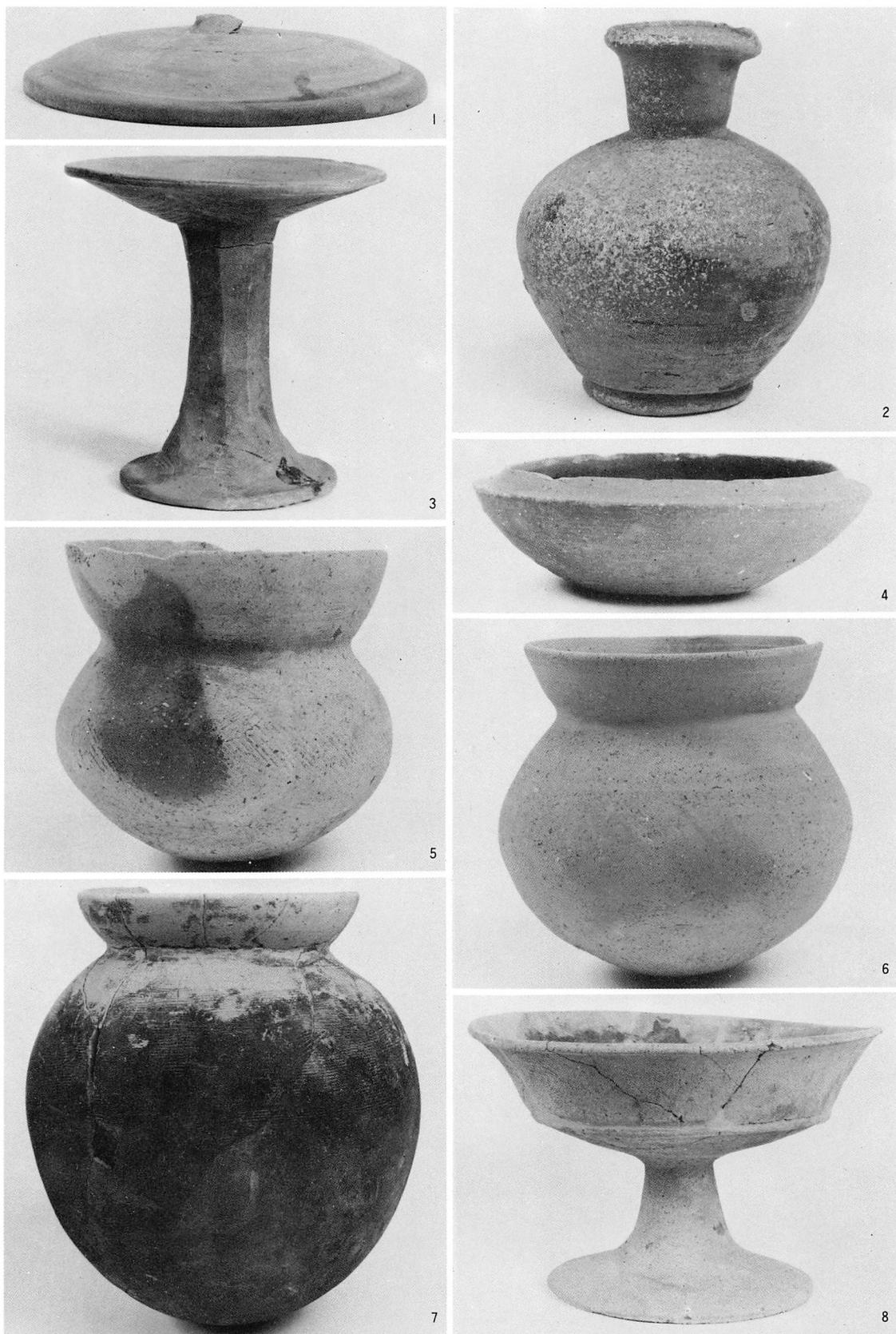
② 試掘 6 全景



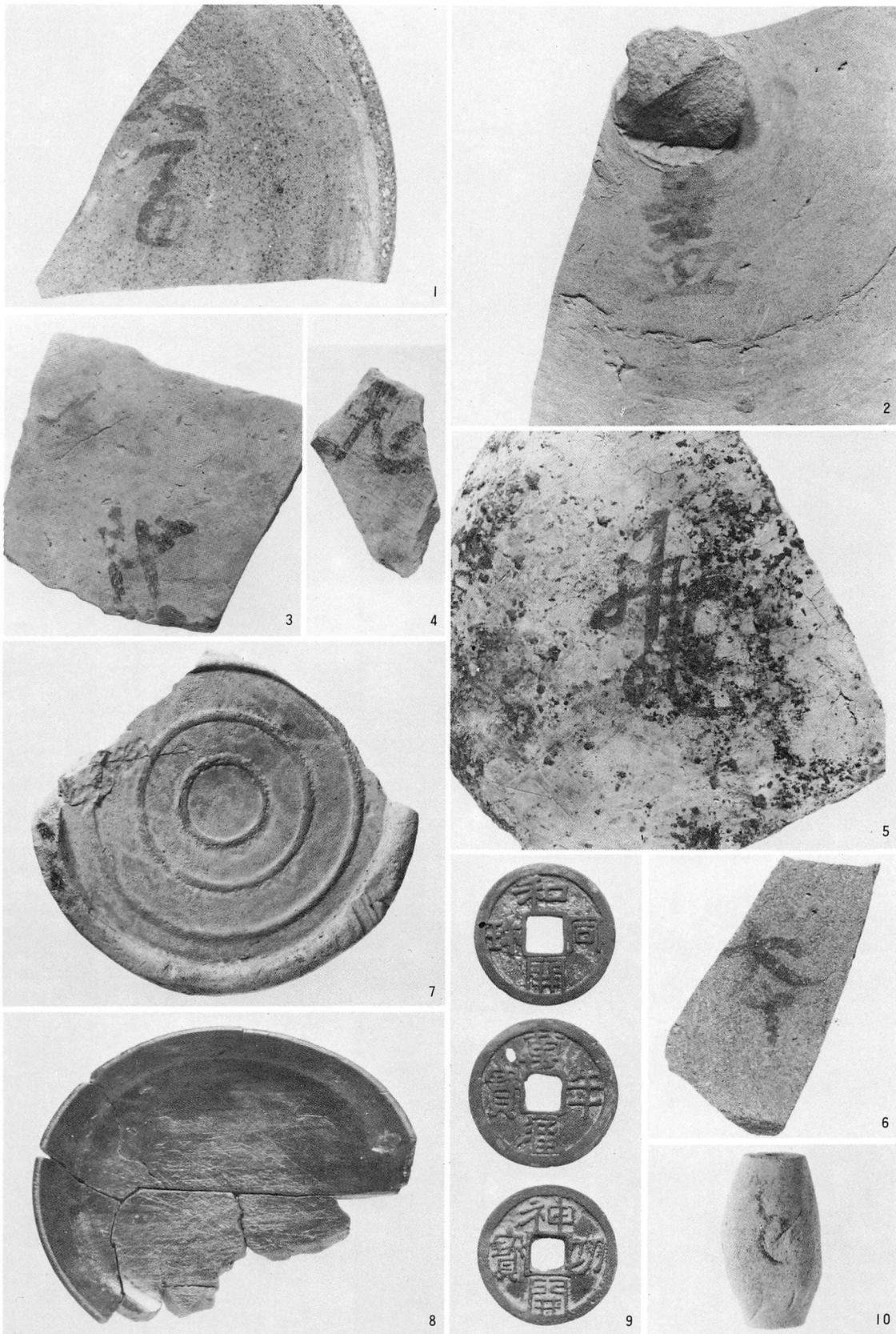
① 試掘 7 全景



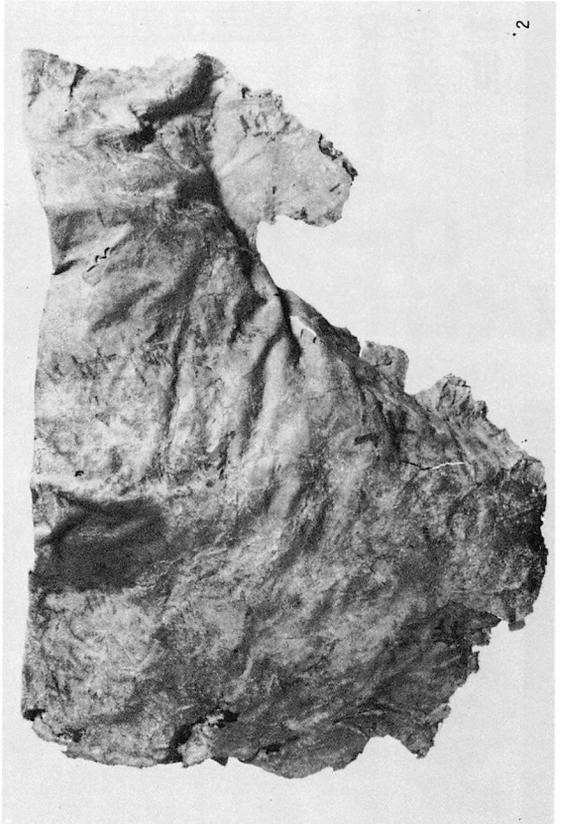
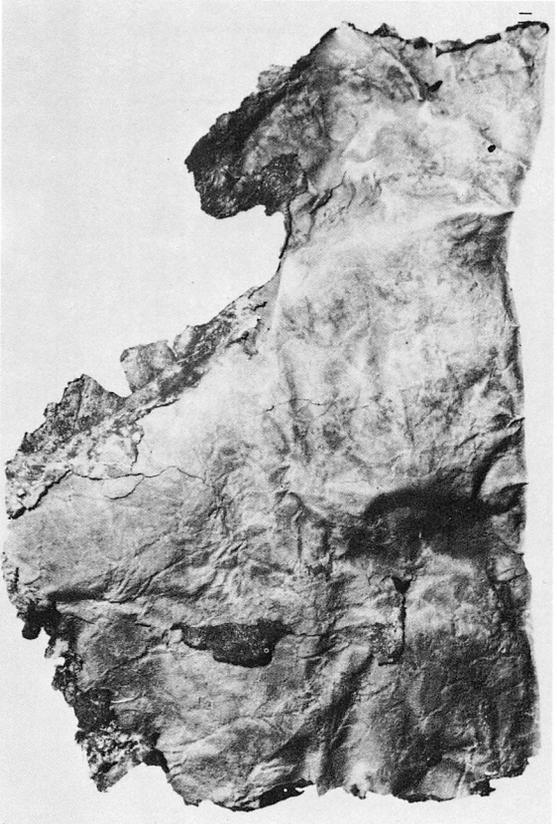
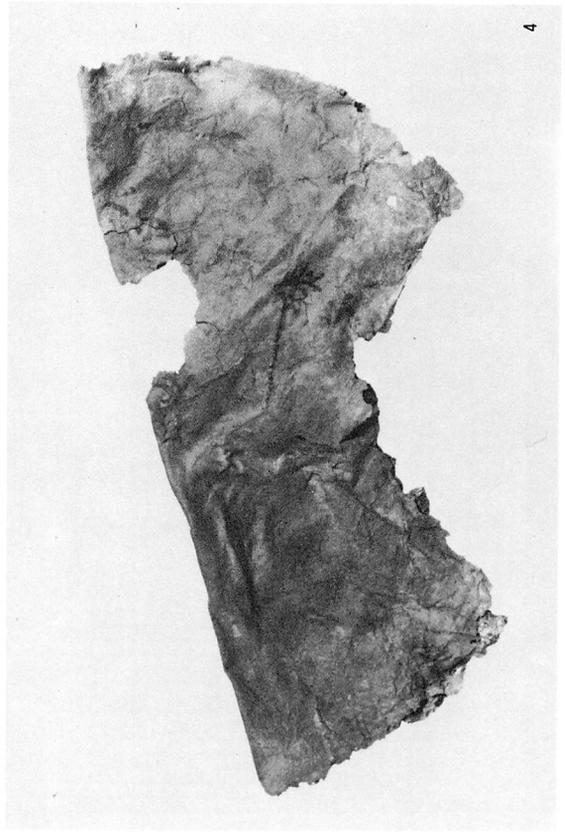
② 試掘 8 全景



SE-A01出土土器：須恵器蓋①・瓶子②・土師器高杯③，SK-B06出土土器：須恵器杯身④，SK-B07出土土器：土師器小型丸底壺⑤⑥・甕⑦・高杯⑧



墨書土器：須恵器蓋①②・杯⑥・土師器杯③④・皿⑤，瓦：重圈文軒丸西⑦，木製品：皿⑧，古銭：
和同開珎・万年通宝・神功開宝⑨，土錐：⑩



紙(SK-B01) : ①紙片A表・②紙片A裏・③紙片B表・④紙片B裏



SK-B06出土土器(弥生式土器)：鉢①②④・把手付鉢⑤・甕③⑥⑦⑧



1



2



3



4

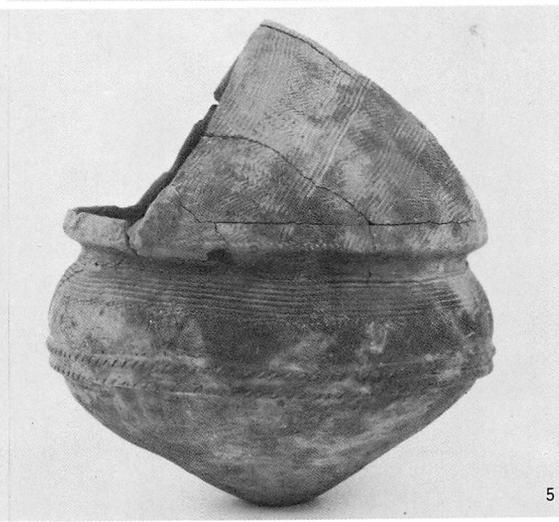
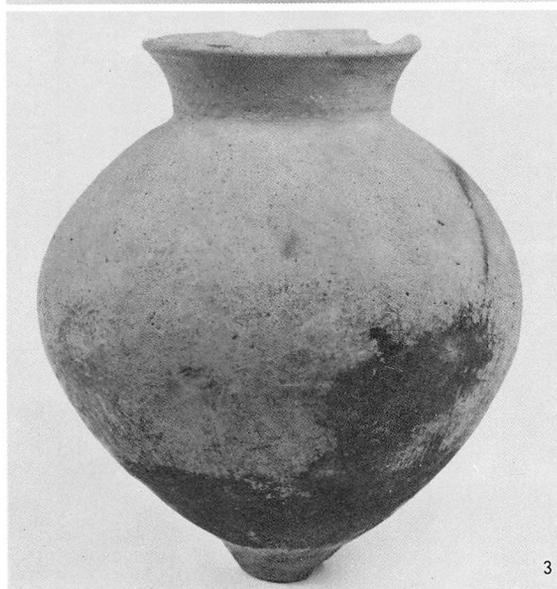
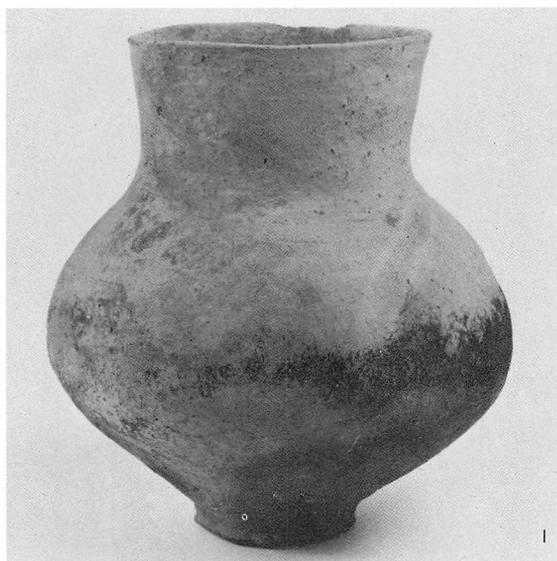


5



6

S K - B 0 6 出土土器(弥生式土器) : 手づくね型土器①・高杯②・短頸壺③・壺④⑥・長頸壺⑤



SK-B06 出土土器(弥生式土器)：壺①②③④・手焙型土器⑤

長岡京跡(昭和55年度)

京都市計画道路1等大路第3類第46号外環状線
整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 昭和56年3月31日

発行集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 〒602京都市上京区今出川通大宮東入ル
元伊佐町265-1
TEL075-415-0521

印刷 真 陽 社